

明日もまた高雲の空飄いなし も く じ

1	最後まで我儘聞いてくださいよ	3
2	疲労する披露宴	20
3	嫌いだ、バレンタインなんか	30
4	あなただけのわたし、わたしだけのあなた	50
5	新たな好敵手ができた日	66
6	ちょっとセイちゃん、横になりますね	82
7	これが私の毎日のつまらない日常	88
8	青空に曝された幸福	108
9	引退後も変幻自在なトリックスターズ	126
10	復讐と幸せとおいしいごはん	136
11	弱きは弱きに執着するという学び	158
12	面影なんか胸に抱かない	166
13	トレーナーさんは差してくる	174
14	それぞれのカタチ	184
15	家に刃向かい、血にあらがって	190
	奥付	200

明日もまた青空の空回りなし

最後くらい我儘聞いてくださいよ

最後の段ボール箱にクラフトテープで封をして台車に積む。これですべての荷物を搬出する準備が終わり、俺は古ぼけた事務椅子に座り込んだ。

原状復帰……というには、あまりにもここで過ごした歳月は長かった。あの柱の傷、そのホワイトボードのへこみ、この床のシミ。そのすべてはあの頃の出来事を鮮明に思い出すトリガーとして存在している。

「寂寥ッ……」
はれりよう「明日が君の定年退職の日だったな！」

「ああ……秋川理事長。お疲れさまです」

「何を言っか、君こそ、四十年もの長きに渡って、本当にお疲れさまだった」

「そうですねえ……」ここで、そんなにも長く過ごしてきたんですねえ。まるで昨日ここに来ただけのようです。門の前で、理事長とたづなさんが出迎えてくれたのが……あれがもう、そんなにも前のこととは……」

「うむ。君はトレーナーとして本当に献身的に勤めてくれた。ただ彼女たちを速くするだけではなくその生涯を見据えての育成に加えて、後進のトレーナーの育成にも多大な尽力、そしてトレーナーとしてあるべき姿の見本となってくれたこと、感謝に尽きない」

「そんなに褒めないでください、それが仕事ですから。……公私もなく、趣味と呼べそうな持ち合わせもなく、これから何をしてどう生きていけばいいのかわかりませんが、それでも、それはそれとして、ここまでいい半生を送ったものだと思います」

「謝罪ッ！ 長年の拘束、本当に申し訳なかった。……せめて、せめて君のこの先の人生が実り多きものであることを、心から祈念する！ これはささやかだが、我々からの饗別として受け取ってもらいたい！ ではこれで失礼するッ！」

大きな箱を置いて慌てたように立ち去っていった理事長の目尻に僅かながら湿ったものがあるのを見逃さなかったが、宅配便のセールスドライバーが荷物を引き取りにやって来たこともあって、あえて見送すことにした。俺だって他人のことを言えた義理ではないのだ。

次々と搬出されていく荷物を、何とも言えない複雑な思いで見送っていると、不意に作業をしていた運送会社のリーダーが声を掛けてきた。作り付けの小さな棚の隅にあつた小箱はどうしますか、と。

あの箱が。少し苦いものを噛み潰しつつ、それを受け取って礼をする。そうだ、これもここに置いていくわけにもいかないだろう。そんなものがあっても、次にここを使う新しい指導者が困るだけだ。

……さあ、泣いても笑ってもこれが最後。

誰もいない最後の授業の時間帯を見計らい、誰もいない廊下を選んで、大きく迂回しながら学園の外に出る。もう目を閉じていてもどこに何があるか、勝手に知り尽くした校内だ。それだけのしがらみがあると、誰かに会えば引き留められて、幽の浮くような送られる言葉ひとつもかけられることだろう。そういうことは好まなかった。老兵はただ、そっと消え去ればいい。消え去った後に偲んでもらえれば十分だ。消えることを告知してまで、偽りかもしれない惜しみを聞きたいわけではないのだから。最後の最後に会うこともできず置いていかれる、引継ぎ済みの元チームメンバー達の顔が脳裏をよぎったが、彼女たちももう新しいトレーナーの指揮下で頑張っている。型落ちの旧型のことには忘れればいいと意を送る。それでもと云うのなら、かつての城だったあの部屋に、置き去ったクッキー缶にそれぞれに宛てた一筆を入れた。それを見て彼女たちが何を思うか何を言うか。それを見届けられないことだけは、少しだけ、心残

りだった。

正門の前にある支線の終着駅からワンマン列車に乗る。この時間にこの列車に乗る乗客はそう多くない。わずかに一駅の距離だし、本線に接続するその駅には普通列車しか停車しない。便利を考えればこの支線で本線に乗り継ぐよりも、少し歩いてその隣の本線の駅に出た方が、快速も停まって都合が良いのだから。

……しかしそれでも、あえてこの列車に乗りたいたい気分だった。これまでのトレーナー生活は何かと急ぎすぎだし、担当達を急がせすぎた。少しだけ、ゆつくり過ごしたかった。

旧型の車両は大きなドア開めの音を響かせた後、足下の安全を確かめるようにゆつくりと走り出した。僅か一駅の区間を、のんびりとゆつくりと、本線に絡みついていく。

時間にしてわずか四分の列車旅。この駅も、ホームに降りたとしても乗り換えで使ったことしかなく、周囲に何があるのかすら知らない。四十年も近くについて、だ。

そんなトレーナー生活の中で一度くらい、この駅の外に降りてみてもいいはずだ。そして今日はそのトレーナー生活最後の日だ。今日を逃すと、もうここにトレーナーとして降り立つことができないのだから。

駅前には静かな住宅が建ち並び、だが所々には商店がある、住宅街とも商店街とも表現できない街路があった。その中にひっそりと、一軒の喫茶店があるのを見つけた。

決して今風のカフェではなく、さりとて往年の純喫茶でもない、そういう至極普通を醸した店。そういえばこんな店でお茶を嗜んだことなどなかったことを思い出し、また昼前であることも思い出した。ここで現役トレーナーとして最後のランチを食べるのも悪くないだろう。一流レストランのように格式張って味がわからないなどというのは嬉しくないし、といってあまりにも気取らずに数百円の丼物で済ますのではあまりにも風情がない。軽い気持ちでその扉を押した。

店内には客はおらず、音もなかった。奥を見るとカウンターの横に、今時アナログなプレイヤーがあり、店の主らしきあまり大きくない女性がレコードに針を落とすところだった。

「いらつしゃいま……え！ トレーナーさん？」

弾みでプレイヤーに身体をぶつけたのか、ビュッというノイズが店内を走る。その声の持ち主は、壮年の薙毛ウマ娘だった。

「ん……？」

「……ああ……そうか。もう最後にお会いしたのも本当に相当前ですからね。トレーナーさん

が気づかないのも無理からぬことです。思い出させませんか？」

「いや……もう四十年ばかりトレーナーをしてきたものだから、ウマ娘の知人はそれこそ何千人といてね……」

「そうですか……。じゃあ、これで少しでも記憶がつながりませんか？ 『ぶっぶっぶ。青雲の志、今こそ見せてあげようじゃないか！』って」

「……あっ！ 君は！」

「思い出せましたね？ そうですよ、あなたのセイちゃんですよ、にやははっ」

思い出した。鮮明に。

悪戯っぱい嘘、時折ほんの僅かに首を傾げる仕草、そして雰囲気。

今日がトレーナーとして最後の瞬間なら、それはトレーナーとしての第一歩を踏み出したとき。自室として宛がわれたトレーナー室に丸まって心地よさそうな寝息を立てていたセイウンスカイ、その娘だった。

「おや？ 驚きのあまり声も出ませんか？」

「……いや、本当に驚いた、こんなことはまったく想定していなかったから……。最後に顔を

合わせたのはもう……三十五年前が最後か……。あれからお互いに連絡することもなく、漠然と、もう生きて会うこともないだろうと思っていた。だから、目の前にいるのがこんなにもスライそのものだというのが、それに気づくための回路が完全に遮断されていた……すまない」

まるで新潟のあの夏の直線を疾駆した後のように胸を締め上げる感覚にさいなまれ、心臓の上を掌で押さえる。鼓動はいつもの倍ほど速かった。喘ぐように深い呼吸を繰り返し、思わず傍らにあったテーブル席の椅子に座り込む。

「トレーナーさん、ご注文、どうします？」

「……え？」

「え、じゃないでしょ。ここは喫茶店なんですよ？ 何も頼まないのなら追い出しますよ？」

「あ、ああ……。とりあえずコーヒーを」

「ちよつとお、ここはチェーンの居酒屋じゃないんですからね、とりあえずってなんですが、とりあえずって。まるで薄めた発泡酒を偽って出したビールみたいな言いぶりですね。……ええっと。あの頃のトレーナーさんは、お抹茶入りの緑茶飲料をよく飲んでいましたよね。抹茶はカフェインが多くて天然のエナジードリンクだ、とか言いながら。……表メニユーには載せていないんですけど、お抹茶はいいのを置いてあるんですよ。あの和のテイスト大好きグラス

ちゃんがイチオシにしている、高くないけどとても上等なのが」

お冷やを持ってきていた彼女は、エプロンドレスの裾をふわふわ動かしながらカウンタースに引込む。コンロの火花が飛ぶカチンという音、次第に主張するケトルの笛、注がれる水音。

「はいはい、お待たせですよトレーナーさん」

やがて、黒文字を添えた小皿の羊羹とともに、湯呑みが置かれた。

「お抹茶そのままはセイちゃん苦手なので、こうやってお煎茶と混ぜてるんですよ。……トレーナーさんも、いつもお抹茶をこうやって頂いていましたよね」

「よく覚えているな……」

「そりゃそうですよ」

彼女は一度、店の出入口の扉に向かい、提げていた札を裏返した。

「なにを？」

「本日の当店の営業は終了ですよ」

「えっ？」

「せっかくトレーナーさんが来てくれたんですよ？　ほかのお客さんにかまけつつ接待するのはちょっと。積もる話もありますし。にやははっ。……ご心配なく。店は閉めましたから、ト

レーナーさんから一文のお代でも取ろうなんて思っていますので」

「へえ……定年退職の日。トレーナーさんがトレーナーさんでいるのは、今日が最後なんですか。四十年間の勤務、大変お疲れさまでした」

「ああ……うん、ありがとう」

「その最後の日に、そしておそらく最後に会うウマ娘が、トレーナーさんが意図してそうなたわけではないとはいえ、このセイちゃんだったんですね？」

「そういうことになるかな……」ここを出た後に見知ったウマ娘の誰かと再会ということがなければだが……」

「む、それは大変。対策しなきゃ」

彼女はそう言ってテーブル向かいの席を立ったかと思うと、グラスとボトルを持って戻ってきた。何も言う前にコルクをボンと抜き、中のワインが注がれる。

「ささ、トレーナーさん、どうぞ。定年まで無事完走した祝杯ですよ？ ……それとも、セイちゃんが注いだ酒が飲めないって言うんですか？」

一瞬だけ真顔に戻った彼女から洩れた気迫に有無が言えなかった。俺はどうしようもない下

戸なんだが。……ええい、どうにでもなれ！

「そんな脅えた顔をしないでくださいよ。私はただ……トレーナーさんにとって初めてのウマ娘であつたと同時に、最後のウマ娘になりたいだけなんです」

彼女の視線が床に落ちた。

「そこまでの紆余曲折はいろいろあつたわけですが、それはとりあえず保留するとして……短くとも今日という日が終わるまでは、たとえ監禁だと云われようともトレーナーさんを私のそばから離れたくないんです。そうすれば……」

視線が戻ってきた。

「私は、あなたのトレーナー生活において、最初に会つたウマ娘で、そして同時に、最後に会つたウマ娘だつたという実績がつくんですから」

「無茶が……ないか？」

「ええ、私が言っていることがめっちゃくちゃだという自覚がないわけではありませんよ。でも、あなたが今日の終わりまではかのウマ娘と会わなければ、私がトレーナーさんの長きに渡るトレーナー生活において最初で最後のウマ娘だつたというのは、たとえこじつけたろうが真実になりますよね。……それだけで、それだけでいいんです。せめて、私にそれだけでも、いただ

けませんか？」

「どういう意味……」

「ここまで来てまだボケるんですが、トレーナーさんは。どうもこうもないです。私が卒業した日。私が持てる限りを越える勇気を振り絞ったときに、トレーナーさんは私のその思いに伝えてくれなかった……そのこと、覚えていないとは言わせたくないですね……」

本当に忘れてなくて封印をした。ハンドラの箱が開いた。頭がズキリと痛む。

「……わかってます。確かに、あのときの私は、本当に絶望に打ちひしがれたし、キングもツルちゃんもスベちゃんもエルもグラスちゃんもずっと寄り添ってくれました。でも。……今後トレーナーとして私たちの後輩を導くという立場上、どうあっても、少なくともあの時点では、絶対に、それに応えるわけにいかなかったんですね」

「……本当に申し訳ない」

「しかたないですよ。トレーナーさんはいつまでも私専属のトレーナーさんではないんです。それでもあのときに私に伝えようとしたら、トレーナーであることはもうできない。実はあのとき、私が巣立った直後に、あなたに師事したいという子がいたことを知っています。その子は無責任に袖にできない。だから私の気持ちに答えられなかった。……そのことに、傷んで卒

業して何年も経って、社会に出て、ようやくその概念が見えてきました。もしもそのとき、私がもう一度トレーナーさんに会って、思いの丈をぶつけていけば、あるいは何か違う結末があったのかもしれませんが。でも私はそれができなかった。……ううん、他人のせいじゃない、私は明確に断られることを恐れてそうしなかった。だからもう、トレーナーさんをなにひとつ恨むことなんかできないし、事実、なにひとつ恨んでなんかいません。でも」

少しだけ寂しそうな顔を作った。

「恨みはしていませんけど、それで『はいそうですか、そういうことだったんですね』と切り替えられるほどまでには、私はオトナになれなかったんです。だから、ほら」

左手を突き出してきた。

「今でも薬指には枷がありません」

「……悪かった」

「だから恨んでいませんよ。これはただ、私が、あなたからの枷でなければ埋められなくなかったというごだわりが強くて、単にあなたに執着をしすぎただけですから。……もっとも、こんな意固地で不器用などうしようもない私に言い寄ってくる男の人なんていなかったか、いたけど私のあなたへの執着があまりにも強すぎて、それに気づくことができなかったのか、ある

いは気づくことを拒否したのか……そういうことです」

「そうか……」

「だから」

「……？」

「それでももし、本心からほんの少しでも悪いと思っていただけているのなら、せめて明日を迎える瞬間まで、私のそばにいて、長いトレーナー生活で私を最初と最後のウマ娘にしてください。それはほんの些細な、つまらない称号なのかもしれませんが、それでも私にとっては、皐月や菊を獲ったとが、そんなことよりもっと、喉から手が出るくらい欲しいんです。それくらいの、トレーナーとして最初の担当からの我儘を、お願いですから叶えてください」

「そうか……」

大きなため息が出た。

「なあ、スカイ？」

「なんですか？ トレーナーさん」

「三十五年って、どれくらいの時間かな？」

「永遠にも感じるくらいの長い時間……ですね」

「そうだな、我々のような、よほど長く生きて一世紀強が限度の種族基準だとな」

「え？」

「地球の年齢はざっと四十六億歳、宇宙については百億年を超えるそうだ」

「ええ、学校でそう習いましたね」

「もしその地球や宇宙からすればその程度、溜息ほどの長さですらないだろうな」

「はい？」

「つまり、その三十五年を永遠にも近い時間ではなく、ほんの瞬間だったと切り替えてもらんという話をしている」

「む。……昔からそうですよね。トレーナーさんはそうやって、とても理屈っぽいところがありましたね。……わかりましたよ、じゃあ、このとても長かった時間を瞬間だったと認識を改めましょう。はい改めました。……それで、どうなるんです？」

「こうなるんだ」

まだ榎がないことを示していたその手を右手で握んだ。驚きの声が漏れたが気にしない。左手をスーツの内ポケットに放り込み、片手であの箱を開け、中身を外に出して、スカイの左手へ向ける。

「……ふえっ？」

「間の抜けた声だな」

「え、いやだって、これ……」

「三十五年前に黙って作った指輪だ。俺がずっとスカイに填めたいと思っていた手枷だ」

「あ……う……」

「こんなにも待たせてごめん。……それでもいいなら、スカイの残りの時間を、譲ってはもらえないだろうか？」

「……はい……。でも、条件があります」

「条件？」

「あなたの時間と交換です。私の時間だけ奪っておいて、あなただけが自由だなんて。そんなことは、絶対に私、許さないんだからね！」

「そうだな。この命ごと一切言切をくれてやる。だからスカイ、君を全部くれ」

その返事は、テーブル越しに首っ玉に響り付く両腕だった。

「本編の余談的なサムシング」

「指輪……えへへ……左手の薬指の指輪……トレーナーさんからの指輪……えへへ」

「……泣くのか笑うのか、ちょっとはつきりしてくれないか？」

「だって……えへへ……。夢では何度も見たけど……本当に……えへへ」

「気持ち悪いなあ……」

「五十四歳にもなったオバサンだって、根底にあるのは夢見る乙女なんです……えへへ」

左手を掲げて見上げたり、逆に降ろして見下ろしたり、近づけたり離れたたり、……とにかくセイウンスカイは満面の笑顔に涙を浮かべながら、俺が填めた左手の指輪を眺めていた。

「でも、あんな無理やり指に填めてくる荒々しいのは滅点ですよ？ もうちょっとこう、ロマンティックに、恭しく跪いてそっと手を取って、ついでに手の甲にそっとキスなんかして、それから填めるとかですね……」

「そこまで言うなら返せ」

俺は目の前にあったスカイの左手からその指輪をひたかった。大きな非難の声が飛ぶ。

「昔からそうだったが、あんまり大人をからかうんじゃない」

「ふえ……ごめんなさい……だって、でも……」

激しい顔で仁王立ちをして、指輪を箱にしまう。その箱は元の胸ポケットに押し込んだ。

「まったくスカイは、限度というものを知らない。目の前にいるのは機械じゃないんだ、心に血が通っているヒトなんだ。スカイは元が聡明なんだから、云いたいことはわかるな？」

「……ごめんなさい……ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

スカイは涙をこぼす。先ほどとは違うベクトルで。

「えっ……？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔、とはこういう顔だろう。

スカイの前に跪き、あの箱を開けて掲げて、スカイの顔を見上げる。

「セイワンスカイ、誰よりも貴女を愛しています。結婚してください」

疲弊する披露宴

「良かったあ！ セイちゃん本当に良かったね！」

桜がちらほら色気を出してきた土曜日。カウスターでミルクをたっぷり入れたアメリカンを暖めていた少し丸顔のウマ娘が、花に負けないほどに華やいだ。

「おやおや、相変わらずスベちゃんは気が早い。はたしてそうですかね……？」

手際良くサンドイッチを半分に切っていた筆毛のウマ娘が、難しい表情で小首を傾げる。

「考えてみてくださいよ。私ももう製造から半世紀以上が過ぎちゃったんですよ？ 今更あの人の子どもを授けられるわけでもないし、向こうは仕事しかしてこなかったいわゆる社畜だつてのに、その仕事からももう不要だつて定年で袖にされた、これからもう先のない無職の年金受給者。余暇を過ごすにも杖とする趣味もなく、朝から晩まで畳に根が生えたように居座つて、やれ茶を汲んで来い新聞持つて来い耳かきはどこだメシ食わせろつてがなり立てる騒音製造機になる未来しかないんですよ？ なんだってそんな不良債権をこの歳で背負い込まなきゃなら

ないんでしょねえ」

「あら、そんなことを言っているけど」

向こうのテーブル席で編み物をしていた、端正だが目尻に苦労が刻み込まれたウマ娘がその言葉に対して反撃を始める。

「その割には左手のリングを、暇さえあれば愛おしそうになでて、優しい顔で笑っているわ。」

それに誰しも早口で捲し立てるときは、それは本心の言葉ではないというのが世の常よ？」

「そうですねよセイちゃん。殿方を、ましてや本人のいない場所で貶すものではありません」
傍らに得物を入れた袋を携えた和装のウマ娘が微笑む。

「そうデス。幸せなのに隠す必要ありません！」

「そりゃあ、みんなは結局のところ、他人事だもん。これからこのセイちゃんがどれだけ苦労しどれだけ不幸になったとしても、自分たちには何にも影響ないんだから」

「あなた本当に相変わらず□は減らないわね」

「へいへい、どーせセイちゃんは□だけですよーだ」

「だけど聞いたデスよ？ 最終直線での猛烈な追込みをかけたことを！」

「え？ 追込み？ セイちゃんは昔から逃げメインでしたけど？」

「そうではなくて、今回の人生を賭けたレースのことよ。自分の思いを全部ぶつけるまで、その返事を聞くまであの飄々としたトレーナーを追い込んだこと。スカイさん、あなたとても強かったわ」

「ミッ！ その話、誰から……？」

「誰からも彼からも、あなたの元トレーナーから私の一流の夫を経て、よ」

「ぐ……あの人は……」

「とにかく、今日はあなた達の記念すべき日になるのですから、そういう細かいことは抜きにしましょう？」

「そうデース！ 夫婦喧嘩は大でも食わないのでベッドの上でやってくださいー！」

「エールー？」

「でもね、私は、セイちゃんがそんなセイちゃん節をまた回せるようになったことが、何より嬉しいよ？」

「うう……ツルちゃあん！ 心の友よ！ ツルちゃんただよ御挨拶ごあいさつに寄り添ってくれる

の！ もうセイちゃん、ツルちゃんにだけ当店の永久コーヒー無料バス発給しちゃうー！」

店の出入口の扉が開く。カウベルが鳴るとともに、「本日貸切営業 明日より暫くお休みを頂きます」という貼紙が見えた。

「ただいま。……みんなもう来てくれたのか。特にスエシャルウィークは北海道からわざわざ足を運んでくれたんだな。本当にありがとう」

「おかえりなさいあなた。買い出しありがとう」

カウンターから飛び出した薙毛の壮年ウマ娘が、エコバッグを抱えた初老男性に駆け寄る。「いつもの卵がなくてね。バックの単価が十六円上がるけど、いいのを買ってきたよ。それとバター。薄力粉も高かったけど強力粉が特売でブラマイゼロ。ジャガイモも高くなっていたけどサツマイモが下がっていたから、ジャガイモ多めでマッシュして混ぜれば、少し甘味が出て面白いかもしれないと思って、独断で調達した」

「ええ、勝手に判断しないでくださいよ。実際にその調合を考えるのは、あなたじゃないんですからね？」

「あ、ああ……ごめん」

「しかたないですねえ。まあ、夫の不始末は妻にも連帯責任を負う義理があるでしょうし、そこはこのセイちゃんがなんとかしますよ」

「ごめんなスカイ、ここはスカイの店なのに、俺が勝手な判断で勝手なことをして。……とりあえずこの食材、厨房に置いてくるから……」

「おっと、ちょっと待って。何かとても大事な約束事を、忘れていませんか？」

自分の唇に指を当てて、そこを離れようとした老年の裾を引くウマ娘に、若干の戸惑いを浮かべつつもそっと唇を添えて引っ込んでいく。

「あらあら、お熱い新婚ですこと」

和装のウマ娘が口到手を添えてくすぐす笑う声を耳に入れて、茸毛の尻尾が逆立った。そうだ、ここにみんながいることをすっかり失念していた。

「しかたないじゃんグラスちゃん。グラスちゃんだつてトレーナーさんと籍を入れたばかりの新婚のときは、一秒たりとも離れないぞって綱の意思が見えるくらい熱烈だったんだよ？」

「あらあ、そうでしたか？ 忘れました」

「卑怯だよ忘れたなんてグラスちゃん！」

「それよりスカイさん、もうすぐ私達の旦那衆も揃うと思うわ。そろそろあなたの夫と一緒に、晴れ姿に着替えてきても良いのではなくて？」

時計の針は二時前になっていた。

「えっ、もうそんな時間？」

「さっさと着替えてくるデース」

「お料理は任せなさい。キングが一流の腕を振るってあげるわ！」

「私も頑張る！ 任せておいて！」

「そうよ、けっばるべみんな！」

「特製サルサも持ってきましたヨ！」

「それは使いませんよエル？」

「ん……。じゃあスカイ。……そろそろ行くか」

「う……。うん。なんだが、緊張する……」

「そうか。俺もだ」

「あなたも？」

「当然だろう。スカイと最後に会ったあるときから、もう叶うことはないと言った夢が、ついに叶ったんだぞ？」

「あなた。……本当にあなたはこれで、……その、私と籍を入れて良かったの？」

「最近な……毎晩、眠るのが怖いんだよ。……意識を手放して再び取り戻したとき、このメルヘンは夢として消えているんじゃないかって」

「私もですよ。だからこそ」

「うん。誰か第三者に、このメルヘンが現実であることを証明してもらおう。……そのための会だったからな」

「……行きましようか。私達夫婦が本当に存在することの証明の場所に」

かすかに震える手で『もう行っていい?』とメッセージを打つと、すぐに『遅いわよ、待ちくたびれたわ』と返ってきた。それを見て花嫁は隣の婿に腕を絡ませて、扉を開けた。

「な……なんか、思ったより疲れた……」

「ああ……。グラス夫妻で高砂の謡^{うたい}までやるとは思わなかったよな……」

「しかも上手い」

「気取らないカジュアルなホームパーティーみたいな私設披露宴だからと伝えたんだが、えらく立派な和装で来るからさ、何か隠してるのかな妙だなとは思っていたよ」

「でも、これでもう、このメルヘンは現実なんだと証言してくれる人がいることに……」

「ただ……まあ、こんなにも色々してもらって、却って申し訳ない気持ちもあるけどな」
力なく笑った声が絡み合い、次第に楽しい合騒に変わっていく。

「スカイはともかく、俺にはもうそこまで長い時間は残っていないけども。……だからこそ、その分を濃縮して過ごさないとな」

「そう簡単に暮は引かせませんよ？ あなたの時間だったものも、そしてその命だって、今はもうあなたが自由にできるものではない。私の所有物なんですからね？」

【補足的サムシング】

結婚披露宴は、黄金世代のメンバーとその夫（なぜか全員担当したトレーナー）を呼んで行いました。なおニシノフラワーがこの場にいませんが、フラワーは黄金世代メンバーではないので余計な気遣いをさせないだろうかというのに加え、友人としてだけでなく時には母や姉や妹として力になってくれたことで特別視しており、フラワー（とその夫。例に漏れず彼も元担当トレーナー）だけを呼んでの披露宴をやるからと説明し納得を得た上で呼ばなかったようです。また、黄金世代を呼んで行った披露宴第一部は映像をメディアに焼いてフラワーの元へ送付しています。

明日もまた青空の空騒りなし

嫌いだ、バレンタインなんか

午前の授業がすべて終わった。

三々五々と教室から生徒達が捌けていく中で、朝から空いていた席を見つめながらつぶやく生徒がいた。

「スカイさん どうしたのかしら……？」

「あら、キングちゃん。もしよろしければ、お昼を一緒にしませんか？」

「グラスさん。そうね……。そうしたいのは山々なのだけれど」

「セイちゃんですか？ 今朝から姿を見かけていませんね」

「フマッターを見ても、昨夜の更新が最後だし、どうしたのかしら？」

「どちらにしても、戦をするにも腹ごしらえは必要ではと。実はお弁当が重なってしまいました、もし差し障りがなければですが、私のお弁当を召し上がってもらえればと思って」

「そういうことなら歓迎よ。少しこの件については憂慮すべき点がありそうだから、グラスさ

んにも知恵をお借りできると嬉しいわ」

教室の隅で机を寄せ合い、キングヘイローとグラスワンダーは弁当箱を開いた。

「あら、グラスさんのお弁当はまた風流ね」

「ええ。トレーナーさんがですね……」

「なるほど。おおよそ、バレンタインデーのチョコクレートの代わりに作って持たせてくれた、
というところかしら？」

「ふふ、ご名答です」

春を先取りした旬の炊込み飯に固く絞った小松菜、だし焼き玉子、竹輪の磯辺、ハートにくりぬいた人参のグラッセが彩りよく配置されている。対するキングヘイローが蓋を取った弁当箱もなかなかのもので、赤じその塩漬けを顆粒に刻み乾燥させたものを散りばめたほのかな桜色の飯にひとくちサイズのハンバーグ、ブロッコリー、ポテトサラダの横にはサワラの西京焼きを配置して矢生姜を添えてある。

「こちらはグラスさんのお手製かしら？ 見事なものね。お弁当よりも、そのお料理の腕を少し分けて頂きたいわね」

「まあまあ。キングちゃんも、最近熱心に練習されているのでしょ？」

「そうね。一流たるもの、やはり料理のひとつくらいはできないとね」

「コッスを握めば、そう難しいものではありません。お菓子と違って、フィーリングでなんとかなりますので。……それはそれとしましてセイちゃんですが、やはり、原因は『コレ』ではないのでしょうかね……？」

グラスワンダーが著先で軽く突いた料理を見て、キングハイローは嘆息しながら頷いた。

「私も同意見なのよ。いくらスカイさんが気まぐれとはいえ、その理由以外で、昨日の今日でここまで変わるとは考えられなくて……」

グラスワンダーに突かれた料理。いうまでもなくハート型の人参のグロッセだ。

「景にはいいみたい。けれど元気に登校する姿はあったという話なのよ。そして私が知りうる限りのスカイさんの秘密お昼寝スポットは当たってみたけれど……」

「そのどこにもいなかったということですね？」

「そうね。といって、学園外に出たとも考えにくいわ。もう少し時刻が下があればともかく、午前中に制服姿でほっつき歩いていれば、補導されるところまでいかににしても学校に通報されて騒ぎにはなるはず」

「ウマグラムも既読がつきませんね」

「まあスカイさんは普段から未読無視をする傾向はあるのだけれど、あのニシノフラワーさんのメッセージにも応答がないらしくて」

「そういうセイちゃんは、少し心配ですね」

「そうなの。夕食の時刻に寮に戻ってくればいいけど、あの子はあれで繊細で、なにかひとつに囚われると他のことを一切考えられない、そんな不器用さも持ち合わせているから……」

「では私達のすべきことは決まったようなものではないですか」

「……そうね。そんなことは私自身も理解していたのかもね。その背中を押してくれるきっかけが欲しかっただけで。……グラスさん、とても美味しかったわよ？　しかし幸せ者ね、近い将来、こんなお弁当をいつも仕立ててもらえるであろう、あなたのトレーナーは」

「まあ、キングちゃんったら」

「およそ事情は理解した。それなら花壇の日課などは今日は忘れればいい。いくらこまめに育てなければ上手く咲かぬ花とはいえ、気もそぞろで世話をされても綺麗には咲けんぞ」

「すみません、エアグルーヴ先輩……」

「構わぬ。私は最近かなり多忙でな。だが今日は久々に時間を作ることができたので、今日の

私はじっくり花と対話したい気分なのだ。ゆえに貴様の助力など不要だ、「ニシノフワ」

「はっ、はい。ありがとうございます」

「……ああ、ちょっと待て」

シャベルを置いて立ち上がったウマ娘は、小さな魔法瓶と、それから手帳の紙片を千切り取ったものを小柄なウマ娘に手渡した。

「今日は寒い。心配事の解決も大事だが貴様自身が風邪を引かぬように。……それから、何か困ったことがあったら相談しろ。携帯電話はあるのだろうか？　そこに番号を書いてある」

女帝は柔らかに微笑んでいた。

既に歩数計の値は優に一万四千を超えていたが、そんな事実にはすら気づく余裕もなく、彼は駆けずり回っていた。

「どこに……いるんだ……」

肩で息を懸念とともに吐き、それでも足の運びを止めることもなく。

「本当に悪いことをした……度が過ぎた……」

だが後悔とは後から悔やむからそう云うのであって、先にその未来を予測して回避していれ

ば、それは先見の明と名を変えるのだ。

もう二度は確認した屋上の扉を蹴破るように飛び出して周囲に鋭い眼光を飛ばす。昼の熱いを齎かされて顔を凍らせた生徒が数名いて心の片隅で申し訳ないと思いつつも、その釈明をする時間が惜しく急々しげに舌打ちをして再び階段を駆け下りる。中庭の楠が、畑の隅の農機具倉庫か。どこも少なくとももう二度は確認しているが、それでも先刻と今とでは状況が変化していないとは断言できない。彼は再び疾駆した。

階段室のデッドスペースに積み上げられた古い学習机の壁の向こう。決して広くはないが一入程度がゆったり横になれる程度の埃っぽいスペースに小さくうずくまる影があった。

「……トレーナーさんのほか……」

その目は白兔のように赤く腫れ、胸に抱いていた数時間前までは直方体だった包みは菱餅のように歪んでいた。

ひょんなことで年が明ける前に見つけた場所。校舎の隅にあるこの階段は利用するものも少なく静かで、意外にもお日様の光が入り込む暖かい場所であることを知ったため、埃さえ払ってマットか毛布でも敷いてやれば新しい秘密の隠れ家ができると目論んでいたところ。そこに

彼女……セイウンスカイはいた。頭から埃をかぶり、クリーニングから戻ってきたばかりの丁寧な裾が利いたセーラー服も煤だらけだ。ぼろぼろと涙ぐみ、それを乱暴に手の甲で拭くも、もうもうと立ちこめる埃はさらにその涙を誘う。

『トリックスター』などという異名を持つが故に、何をするにも策を巡らせ、予防線を張り、旗色が悪くなるとサッと退いて笑ってしまかす。いつまでもその戦術でいいのだろうか。

「そう思ったから、頑張った……のに……っ」

胸に抱いた箱がさらにぐしゃっと潰れた。

「あのトリックスターにしては今回はえらく直球勝負な作戦だな。風邪でも引いたのか、それともニシノフラワーの入れ知恵か、だなんて……。トレーナーさんのバカ……バカあ！ そんなじゃないよ！」

「ここか……スカイ？」

ピクリと身体を硬直させる。聞き覚えのある、いや、忘れてくても忘れることが叶わない柔らかい声音。ゴトリと積み上がった机の一角が除かれて、顔を覗かせて、その空気を吸い込んで思いつきり噎せ返った。

一瞬り激しい該込みを繰り返した後、再びその声の持ち主は顔を突っ込んだ。

「本当に申し訳なかった。スカイ、ごめんな」

「どうして、ここが……？」

「思い当たる場所はずべて探したけど、いない。ということば、過去にスカイが好んで、俺に教えてくれた場所にはいないということだ。……となれば、俺が知らないスカイのお気に入り、この場所ということになる。であるなら、スカイと同じ価値観、考え、思いを持ってこの世界を見るしか法がない。そう思ってあちこちに視線を巡らせたら、ここが見えたうちのひとつだ」

「トレーナーさんのバカ……」

「……そうだな、スカイの思いをなにも考慮できない、とんでもないバカだよ」

「この……あほっ、間抜けっ、鬼っ、悪魔っ、唐変木っ、すっくとどっこいつ、脳タリンっ、トンチキっ、鈍感っ、蛍光灯っ、板付きかまぼこっ、変態っ、英語の先生っ！」

「……残念だが英語はそこまで得意ではない」

「知らないっ！」

「とりあえず、出ておいで。ちゃんと広けてお天道さまが見ているところで、目を見て、スカイと話したい」

「やだー！」

「……そうか。わかった。そこまで拒否されてしまうのなら、しかたがないな」

大きく溜めた息を吐いたかと思うと、出入口のスペースがゴトゴトと大きく軋んだ。

「スカイが出てきてくれないなら、こちらからそこまで潜るしかないからな」

ただでさえ大人ひとりが寛ぐにも足りない程度の広さしかない場所に、そこまで大きな体軀ではないとはいえ成人男子に潜り込まれてしまつては、いかなワマ娘といえども身動きひとつできなくなった。いきおい、上に覆い被さられるかのような格好になる。壁ドンならぬ床ドンだ。

「顔も髪も埃まみれじゃないか……制服もくしゃくしゃの煤だらけにして。それに……これはハウスタストでやられたな。目も真っ赤にして、それにこれ、埃まみれになった手で目を擦ったんじゃないか？ こんなにも、ミミズ腫れになつて……」

懐のポケットから取り出したウェットティッシュでそつと顔をポンポンと軽く叩くように拭き、裏返しにして髪を拭く。精一杯の抵抗をしたくても、ここで下手に暴れれば積み上げた机が崩れて下敷きになりかねない。それで自分が怪我するのは自業自得だとして諦めもつくが、潜り込んできた驚愕雑言の塊を潰すことまでは計算に織り込むことができなかった。

「や、やめてくださいトレーナーさん！」

「やめてたまるか。一時の怒りなんかでハウスタストをアレルゲンにしまったら、それこそ本当に一生後悔するぞ」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「俺のせいだ。でもそれは後でじっくりたづね、土下座でも百叩きでもなんでも受けてやるからその話は後回しだ。スカイの可愛い綺麗な顔を、これ以上ハウスタストなんかに変なまじわるわけにはいかないんだよ！」

「ミッ……」

「だから、な？ 怒っているのはわかる。そしてその怒りは当然だし、そうさせてしまった俺はどんな仕打ちでも受けることに一切の異論はない。でも、そのためにスカイが酷い目に遭うのは違う、そんなことは絶対にあってはならない。他の誰が許しても、たとえスカイ自身が許したとしても、俺がそんなことは許さない。だからここを出るぞ。さあ、おいで！」

ぐっと手首を引かれた。それは、予想だにしていなかった、ヒトミミのそれとは思えないほどの強い意思の力だった。

為す術もなく広い場所に引きずり出された彼女は、新しいウェットティッシュで顔や髪のみならず、手首や脚まで丁寧に埃を拭き取られ、最後に猫の刺繍があしらわれた浅葱色のハンカ

子で仕上げられた。大好きな、自分のものではない匂いに当てられ、頭が少々ふわふわする感覚に包まれる。そしてそのハンカチに覚えはあった。彼がトレーナーになってすぐに迎えた彼の誕生日に、誕生日だと聞いたものの当然ながら今日の今日で何も準備することができないからと、勿体ぶって女子中学生ウマ娘の使用済みですよとか云いながら押しつけたそれだった。「まるつきり腫れていない、といえはワソになるが、そこまで酷い状況になることだけは避けられたか。……とはいえ、これは急ぎでちゃんと処置しないと、間違いなく尾を引くな……」外壁にかけてあった上着を振って、可能な限り埃を払ったそれをかぶせ、彼は担当少女の身体を横にして抱き上げた。

「な、なななにを……」

「本当は寮に帰ってシャワーで身体を綺麗にするのが正解かもしれないけど、その格好で寮に戻すわけにはいかないからな。人目もある。一旦トレーナー室まで行って、熱めのお湯で絞ったタオルで身体を拭いて、抗アレルギーのクリームを塗ろう。制服もクリーニングに出したほうがいい。トレーナー室ならスカイのジャージが洗い替えて置いてあるから、ひとまずそれを着ればいいだろう」

「や……降ろして……」

「降ろしたがために、こんなにボロボロになったスカイを見世物にするわけにはいかない」

「それもこれもみんな、誰のせいだと……思ってるんですか」

「知ってる、俺のせいだ。ごめん」

「ごめんで済むなら……」

「そうだな。警察は要らない、裁判所も建てなくていいし、刑務所も閑古鳥だ」

「本当に、そうですよ」

外目に顔を晒さないように内を向けさせ、そのまま階段を登っていく。

「あなたスカイさんのトレーナーではなくて？」

「ん……ああ、キングヘイローと、それからグラスワンダー……」

「スカイさん？ 心配したのよ？ これは一体全体どういうことなのかしら？」

「ああつと、申し訳ない。その話は後日、改めて全部俺から話をさせてもらうから、今は堪えて、彼女を……スカイを少しだけ休ませてあげてもらえないだろうか？ この通りだ」

「……っ！」

「後で次第をお話しくださいますね？」

「無論だよ。ただ、スカイの名譽のためにこれだけは言っておくよ。この件で悪いのは全面的

に俺だ。だから少なくとも、この件に関しては、一切スカイを責めないでほしい」

「……承知しました。男子が年端もいかめ女に頭を垂れてそこまで仰るからには、それ相応の理由と根拠があることだと推察します。では後ほど必ず、お話してください。私達もセイちゃんを心配して探しておりましたので」

「ありがとう、恩に誓う」

「ごめんねキング、グラスちゃん……」

「スカイは今は何も喋らなくていい。喉が焼けてる。無理に声を出すと声帯が潰れるぞ」

再び階段を登り始めたトレーナーを見送り、二人は顔を見合わせる。

「ふふ、そういうこと、みたいですね」

「ええ。ほんと、人騒がせなのだから」

「フラワーさんにもお伝えしておきましょうか、まだ詳細はわからないまでも、もう心配することはないと」

「そうね、あの子もこの件では、とても心配しているはずだから」

処置が適切で効果的だったのか、あれだけあふれて止まらなかった涙も落ち着き、痒みが酷

かった肌も錆びてきて、ゆっくりとトレーナーの腿をそうしていた枕から頭を上げると、お気に入りのバステルブルーのマグカップに入れられた温かい麦茶を振る舞われた。初めて洗眼液というものを使ったが、ゴロゴロという異物感がすっかり消失し、なかなか有効的だという知見を得る。麦茶も夏に冷やしたものを飲むというのが常識だったが、温かいそれも優しく身体を隅々まで浸透していく感覚が心地よい。

「もう少しゴツゴツした硬いものかと思っていたんですが、なるほど、なかなかトレーナーさんの膝枕、心地よい眠りを誘ってくるんですね。これはセイちゃん、いたく気に入りました。癖になりそうですよ？」

「うーん。それは褒められているのか貶されているのか、いまいよくわからない」

「褒め言葉でもあると同時に、貶し言葉でもあるかな、といったところですね。トレーナーさんは学生の頃は遠泳の選手で、そこらでは随分フイフイと慣らしたそうですけど、不摂生な社会人生活で、だいぶん筋肉を落としていませんか？ それはそれでセイちゃん心配です」

「そうだなあ。指の間にあった水掻きも、あの当時から思えばかなり衰えてしまったし、これからはちょっと、スカイにああしろこうしろって言うだけじゃなくて、多少は一緒に動いた方が良さそうだな……」

「です。……それはそうとトレーナーさん、セイちゃんはとてもお腹が空きましたよ？」
「ん……もうすぐ夕方の六時か。もう他人に見られても恥ずかしい姿形でもないな。どうだ、立てそうか？ 寮まで送っていい？」

「トレーナーさんはさあ……。今日はいつだと思っているんですか、かの有名なバレンタインデーなんですよ？ ちょっとくらい、いつもトレーニングを頑張っている愛しい担当に、ご褒美としておいしいごはんのひとつくらい、食べに連れて行こうとは思わないんですか？ ……それに、どこかの誰かさんのせいで、セイちゃん今日はまだ何も食べていないんですよ？ 朝に寮の冷蔵庫に冷やしてたお水を飲んだだけなんですよ？」

「だがなあ、もう時間がこんな時間で、それに寮でも夕飯の時間だろう？」

「だからあ、今日を一体全体いつだと思っているんです？ 二月十四日の金曜日ですよ？ つまり明日は土曜日だということは世間中で持ちきりの評判なんですよ？」

「そうか、俺はそれを一般的な常識だと認識していたが、世間で評判になるほどにすごいことだったのか……」

「そういうわけでして、実はセイちゃんは万一を見越してですね、なんとなんと、帰寮遅刻届を好評提出済みなんです。……むろん、予約なんかしていないしそもそもトレーナーさんがそ

んなどころをご存じなわけないでしょうから、お高くて雰囲気がいいお店は無理だとしても、それでも余計な悲しみを背負わせた分、セイちゃんを喜ばせてもいいんじゃないです？ 第一パレンタインデーみたいな日に帰りが遅くなりますと高らかに宣言したウマ娘が、門限どころか夕飯前に帰ったりしてみた日には、セイウンスカイは日和ったとか噂されるのは明白で、もう明日からトリックスターの異名を掲げて歩けたものじゃありません」

「わかったわかった……と、言ってやりたいところではあるんだけどさ」

「はい？」

「そのさ、着ていく服はあるのか？ 制服は埃と煤だらけでさつきクリーニングに出したばかりだし、今のようにジャージを着ていくわけにもいかないだろうし、そも、ここに着替えていけるような服なんかはないだろう？」

「……ひとつだけ、あるんじゃないですか？」

「ないだろう？」

「あるじゃないですか、……ほら、私の勝負服のプロトタイプが！」

「それ着ていくのか、マジか、勝負かけられてしまうのか俺。着替にされて海に投げ込まれるのか？ 今でも多分、五キロやそこの遠泳はできるだろうけど、せめて放り込む前には手

足の拘束はほどけよ？」

「そんなことしませんでした。私をなんだと思ってるんですか。……さて、そうと決まれば行きましょう。セイちゃん着替えますから、トレーナーさんもあのロッカーに吊るしてる対取材陣用のかっこいいスーツ着てくださいな。ほらほら、早く早く！」

「あ、ああ……」

「あれ？ どこ行くんですか？ トレーナーさんも着替えるんですよ？」

「いや……俺も着替えるけどさ、スカイもここで着替えるんだろう？ まさか俺の前で着替えるつもりなのか？」

「……ミッ！」

ほとんど全開にしていたジャージのファスナーを掴み、腕をクロスにしてしゃがみ込む。

「……だろ？」

「で……出てってッ！ 早く！ 忘れてッ！」

街のカジュアルなイタリアンレストランで赤ワインとジンジャエールを酌み交わしてタクシ

ーにエスコートされて帰寮し、門前で悪戯心から抱きつけば意外にも包み返してもらい、それを見ていた寮長や同室のサクラローレルに程々にからかわれ、就寝前に寢床で打った「今日はそこそこ楽しかったですよ、おやすみなさい」というメッセージの返信が「ハウスタストに負けたのに、お酒をいれたせいですごくすごいじんましん、たすけてすかいかゆいいたいあついしんどいつらいなきたい」だったことに関しては、また別の話である。

「どうしてここまでセイちゃんが及第点を出すくらいにはちゃんと二枚目を演じてきたのに、こんなところで三枚目に落っこちちゃうのかなああの人は……」

そう苦笑するスカイの顔は慈愛に満ちていたと、後に寮のルームメイトであるサクラローレルは語ったものである。

「ワンポイント補足のサムシング」

スカイとトレーナーがディナーに行った「カジュアルなイタリアンレストラン」とは、しょせんファミレス（ジョリーバスターサイゼリヤみたいな）です。スカイの指摘通りどこにも予約をしていないし、今更おしゃれな店に予約を入れようとしても近場で取れるわけもなく。

それでもセイちゃんは「大好きな人と一緒に楽しい食事ができるなら、そりゃロマンチックな高級店でなかなかできない稀有な経験ができるのも嬉しいけど、ファミレスはファミレスで気取らず楽しめていーじゃん」って娘のはず（□先では「もっといいところに連れて行く甲斐性くらいないんですか？」と言うとしても）だから、とても満足でした。

なおここで気分を入れるために乾杯したのですが、未成年のスカイはともかく自分だけでも赤ワインで「アルコール」という大人っぽいアイテムを場に出して、少しでもスカイを満足させようというセイトレの気遣い。これがあつたために、トレーナー退職の日にセイちゃんは赤ワインを祝杯だと下戸の彼に出しちゃったんですね。

それからバレンタインデー当日、セイちゃんが胸に抱いていたトレーナー宛の贈物は、結局そのままあの隠れ家に忘れて、しかも様々な複雑な感情によって二度とそこへ足を踏み入れな

かったためにずっと置き去りにしていました。このときにセイちゃんがトレーナーに贈ろうとしていたのはネクタイとカッターシャツとハンカチ。なので腐らないですつとそこに放置されており、スカイ卒業数年後にパリケードになっていた古い机が撤去された際に、日に焼けているあせかけた包装紙に包まれた箱が発見されてたづなさんと理事長の下に届き、開梱すると当時のセイちゃんが精一杯に書いた稚拙だが真摯な愛の言葉に、卒業後当該の二人が一度も接触をしていないことと、おそらくその状態が永劫に継続するであろう関係になっていることについて、二人は胸を痛めたそうです。

なおセイトシにはこの忘れ物の件については退職の日まで報告されませんでした。退職の日には隣別だと理事長から渡された箱の中に、長年にわたって秘匿したことについての謝罪の手紙を添えてこれが入れています。……まあ二人で自己解決した後なんですけどね、それが確認されたのは。

わたしだけのあなた、あなただけのわたし

それはまるで地獄のような一時間だった。

「ちょ……ちょっと休憩しましよ！ 表の札を裏に返してください！」

カウンターに突っ伏すようにエプロンドレス姿が悲鳴を上げ、店に残っていた最後の客を送り出していたカマーエプロンを纏う男が苦笑しながら「営業中」の札を裏に返す。

「なんですかあの混雑は。一体全体……この一時間で何人来たんですか……」

「ええっと、二十六組、四十六人かな」

POSレジの管理画面を開いたカマーエプロンが冷静に調べて報告する。

「ここ、そもそも客席数十八ですよ？ この一時間で何回転したんですか……？」

「二回転半とちょっと」

「いや冷静な回答が欲しいんじゃないって……」

「わかってる。お疲れさまスカイ。店も一旦閉めたことだし、昼のまかないにしようか」

「……うん。もう疲れたよあなた」

「わかった。座って少し待ってて」

カマーエブロンンの初老男性は軽くその耳を揉むようにスカイと呼んだエブロンドレスの頭を撫で、手早く茶器の準備を始めた。最愛の天に撫でられた頭を押さえて年甲斐もなくはにかみながら、エブロンドレスを着た店主のセイウンスカイは、フロア最奥のいちばん目当たりがよいテーブルに座る。

やがてトレイに大きめのポットとふたつのマグカップ、そしてピーマンと人参に細く裂いた鶏の胸肉を合わせピネガーとオリーブ油のソースを絡めたサラダ、もうジャバニースマカレルのセビーチエと呼ぶ方がそれっぽいアジの南蛮漬け、スパイスが香る色気を醸した米飯が盛られたランチプレートが二枚運ばれてくる。

「わあ……今日のも美味しそう……」

目の前に置かれた昼食を見て、ぱっと華やいた顔になる。マグカップには温められたミルクが半量、そこに熱々の濃いアッサムがなみなみと注がれ、少量のクロープの粉末が降り注ぎ、別の芳香が鼻腔をくすぐった。

「さ、スカイお嬢さま。ポナヘティート」

「いただきますーすー!」

「ああ……今日のお昼もすこかった……毎日こんなまかないが食べられて、セイちゃんは今までいちばん幸せです」

「そいつはどうも。いまのスカイは邪気なく美味しいもんは美味しい、不味いもんは不味いって言うて食べてくれるから、腕の振るい甲斐がある」

「まさかあの朴念仁はくねんじんなトレーナーだったあなたにこんな陽し球があったとは、お釈迦様でも存じあるまいってやつですね。愛する夫と有能な厨房担当を一拳両得にしちゃうセイちゃんはさすがトリックスター、鮮やかなお手並み、すごい!」

「ははは……でもな、スカイの担当をしていた頃は、まさか自分にこんなことができるとは露ほどにも思ってたなかつたぞ。実際、メシは学内のカフェテリアが、でなければカップ麺、せいぜい頑張ってトレーナー寮の他のやつらと共同で米だけ炊いて、商店街かスーパーで買ってきたお惣菜を電子レンジで温めて食うか、料理得意を自称するやつが作ったのをつまんで食うのが関の山でさ」

「ほうほう。……では、どうしてこんな才能が突然に開花したわけ?」

「自分のためだったら、一生こんなマネはできなかったな。トレーナーをやっていたらいろんなウマ娘の育成をして、中にはとんでもない大食らいな娘がいるかと思えば、逆に口という器官は声を出すための以外の用途はないと信じているような娘もいて。……食うことが楽しみでこれ以上の幸せはないって娘に食うなって言うのは簡単だし、その逆に食事はこの世で五指に入る苦行だと思っている娘にもっと食えつても簡単だ。でも言われた方は？」

「うーん。セイちゃんは過食でも拒食でもなかったから本当のことはわからないけど、たぶん難しいよね……」

「とんでもないストレスに襲われる。それでも食うまいとが食おうとして若干ヒステリックになる程度で済めばまだいいが、恒常的にそうなれば確実にメンタルを壊す。健全な肉体にこそ健全な精神は宿ると云うが、その逆も然りだから、精神を病むと走るところかそもその健康を損ねるし、下手すると心の苦痛で命を絶ってしまう可能性すらある」

「……怖い話ですね」

「じゃあ、多少食い過ぎても問題ない、あるいは量が食えなくても問題ない。そんな献立を考えられるようになればなと思ってね。まずはカフェテリアの調理員として、トレーナー業に従事していない時間帯なら年中無休の二十四時間即応体制で構わないから使ってくれ、給料も二

年の実務経験をくれるだけでいいからと頼み込んで兼務した。とはいえ生徒達の見えるところで現役トレーナーが鍋振っているのは都合があまり良くないから、基本は裏で食器を洗って野菜を刻んで米を研いでスープを炊いて、そういう裏方業務にほぼ専属だけどさ。ありやもうあの頃の若さだから押し通せたが、今やったら三日も無理かもな……」

「ええ……それはまた思い切って……」

「まさかトレーナー業放り出してまで働きに全日制の養成学校に行っていられないからな。あと、カフェテリアには外注業者さんが入っていたのは幸いだった。トレセン直営だと法令的な問題で、建前でも上の人達が明らかな過重労働を『知りませんでした』でシラを切るのが通用しないからさ。そして実務経験を二年積んで国家試験を受けて、まず調理師免許を取った」

「マジですかそりゃあ料理上手なわけだ……」

「それから短大を社会人入試で受けた。こっちはまあ、毎日通学しなくても通信でもある程度の講義を受けられたから楽で、それに栄養士免許は指定の養成機関で必要な単位を取得するだけで無試験でいいから、調理師のときに較べればはるかに楽だった。それにちょうど一時期、他の売れっ子専属トレーナー達が多忙で手が回らない事務関係のサポートをメインでやって、時間も比較的余裕があった時期とブッキングしたのも幸運だったと思う。……そして本来なら

栄養士から管理栄養士を目指せば強いんだが、管理栄養士ってのは一段厳しいコースで勉強して規定単位取得後に国家試験だから、さすがに二足の草鞋わらじでは時間の捻出が難しいと思って。

別にこれを本業として食っていくためでもなかったし、同時に何十何百という大勢の管理ではなく、トレーナー業の片手間で数名程度の育成担当ウマ娘達の栄養管理なら、栄養士と調理師免許程度の技能教養でなんとかなるだろうと思った」

「いやいや、もうそれは立派に本業として栄養士や調理師として第一線級の活躍ができるレベルでしょう？ それこそカフェテリアの管理責任者に抜擢されてもおかしくないレベルじゃないですか。中央のトレーナー試験にパスできるくらい頭がいいはずなのに、あなた底抜けのバカなんじゃないんですか？」

「えらく酷い言われようだな。……まあそんなわけで、さすがに限度はあるが、心置きなくいっぱい食っても心配がない、あるいは逆にあまり食えなくても相応の身体が作れてしっかり走れる、そんな栄養指導や食事指導もできるようになった。といってもトレーナーとしての守備範囲が少し広がっただけで、結局のところスカイみたいに大きなGでパンパン勝てるような、そういう華々しい実績のあるウマ娘は育てられなくて、だからトレーナーとしては至って凡庸はんようだったけれど、それでもあのトレーナーに師事すれば重賞を狙える程度までは確実に育て

でもらえるのかなんとか評価されてみたいで、大家族ではないがチームも持って、おかげさまで定年までトレーナーを続けることができたよ……」

「そうですか……。つまりそのスキルは、私以外の愛するかわいいウマ娘ちゃん達に鼻の下を伸ばすために得たと、……こういうことですね？」

「……え？」

「ごちそうさま。食器は水に漬けておくので」

有無を云わさぬ強さでセイウンスカイは立ち上がり、厨房へ消えてしまった。

「……と、いうわけで」

「いや……。非常に今のスカイさんならやりそうだなとは思いますが、そして今回に限っては、あまりあなたに非があるとも思えないのだけれど、それでも犬でも食べないものをホイホイと軽率に持ってこないでいただけるかしら……？」

「面目ない……」

「あらあら、こんなにも面倒な重い女子でしたっけ、セイちゃんってば」

その翌朝、ベッドの枕頭台ちんとたいに一枚のメモを残して、セイウンスカイはいなくなっていた。調

べれば愛用の釣竿とクーラーボックスと、イベント出店用にと定年を迎えた退職金でフードトラックとして購入した有蓋貨物車に発電機も消えていたので、それらを横んで家出をしたらしかった。幸い架電をすれば呼出をする音は鳴り、メッセージを送っても返信はないものの『既読』のマークは灯るので、少なくともこちらからの呼びかけがまるで届かないという状況にはないらしい。

「あの車と一緒に家出をしたのなら、雨露を凌ぐことができる最低限のねぐらとキッチンも確保していることよね。安全に車を駐めておける場所さえあれば、安価に長期間の籠城も可能、しかも敵襲がありそうだと思えばすぐさまそこから逃亡して新しい場所から戦況を立て直すことができる……ふふっ、スカイさん、そういうところのしたたかさは、昔から変わらないわね」

「本当に、そこはセイちゃんらしいですね」

「いや……感心してないで、どうにかする方法を、せめてヒントだけでもなんとかしてもらうことはできないだろうか……」

「あー……私の夫もだけど、あなた達トレーナーというのは、何の変哲もない事象を見て急に閃く人種だったわね……。それこそヒントさえあればどんなことでも勝手に解決できるおかし

な人」

「つまりセイちゃんは、『あなただけのために』とトレーナーさんにお料理を作ってもらったことがなくて、それで栄養管理や食事管理まで甲斐甲斐しくお世話を受けた後輩ウマ娘に嫉妬したということではないかと」

「……ああ、言われてみると、店で一緒に食ってる三度のメシは、あれはあくまでまかないで、その日か前の日に余ったものを、多少はアレンジする程度はともかくそれで出しているから、スカイのためだけに作ったものではない……か」

「それからあのお店、特に決まった店休日があるわけではなかったわね？」

「そうだな。何か特別な用事があるときとか、一緒に旅行に出たりするとさ……か」

「つまり本当に、トレーナーさんはセイちゃんにセイちゃんのためだけに料理を作ったことがない、ということですね？」

「……なるほど」

「……グラスさん、もうヒントもこれくらいで良いのではなくて？」

「そうですね。私達のセイちゃんサポートはこれで十分ですね」

「せいせい頭張りなさい。この件についてはこれ以上手助けはしないけれど、いい報告を期待

しているわね」

「おいしいG・アップレートを作ってくださることを期待しておりますよ」

運転席横の補助席を開いてちょこんと座り、焼いた魚の身を箸でほぐす。釣ったばかりの天然物をすぐに処理して適切に冷蔵庫で寝かせた上等。塩加減も申し分なく、ちゃんと手順を抜かりなく踏んだので網に皮や身を持って行かれることもなく、我ながらA品、デパートの地下で売っていたものを出したと言われてもバシることはないと自負したイサキの塩焼き。

「なんだか……あんまりおいしくないや……」

それでも、奪った命を無駄に捨てるわけにはと箸を進めるも、途中で動かなくなった。

「あの人が焼いてくれてたなら……きつととてもおいしいのに……」

「……そうか？ 美味そうないサキだけだな」

車の荷室側から不意に声が掛かり、あまりにも慌てたセイウンスカイは持っていた皿を空中へ放り投げた。

「おっと。もったいない」

声の主はその皿をサツと掴む。ほぐした身を指でつまんで口に入れる。

「……うん、いい加減だ。これは美味い」

「え……あ……なんでここが？」

「だってスカイ、スマホのGPS設定を切っていないだろう？ その上、これを焼いたときの換気のためだろうが後部荷室のドアは開けっぱなし。どうぞ入ってきてくださいって言ってるよ
うなもんだぞ？ 人の気配のない場所とは云え、いささか防犯意識が欠けてるなあ」

「GPS……ふえっ？」

慌てて設定を調べる。……なるほど、指摘の通りだった。

「だからデバイスを探す操作をして、ここまで追ってきた。そのスマホとこのスマホは紐付け
されているから、GPSが切れていないことに気づいた後は、もうスカイがいるところへ迎え
に行くという選択しかなかったよ」

「え……や……だって、ここ、最寄り駅から歩きだと軽く半日はかかるはず……」

「バスなら最寄りの停留所から四時間半くらいかな。そのバスは土休日に一便だが」

「まさかタクシー？ いくらかかると……」

「そんな贅沢するか。アレだ」

その指の先には一両の見覚えがある百二十五の原付スクーターが駐まっている。

「はあつ？ ……前から薄々感じていたけどいま確信に変わりました、あなた本物のバカでしよう！ だってあれだと店から何時間走ることになるんですか！」

「昨日の夜九時に店を片してから出発して、途中で何度か道の駅とかコンビニで休憩を入れながら来た。着いたのはさつき。……いやあ、久々に学生の頃に軽二輪のバイクでロングツーリングを楽しんでいたことを思い出したよ。忘れかけていたがなかなか面白い。バイク趣味はまた始めるのも悪くないな！」

時計を見る。

「……十八時間走ったんですか？ あなたそんなにもバカだったんですか！」

「おっ、マゴチがいるな？ こいつは釣ったら早く食べないと一気に鮮度が……って、よしよし偉いぞ、ちゃんと血抜きしたな？ それからガシラか。いい大きさだ、お煮付けにしよう」「か……勝手に決めないでくださいよ！」

「スカイはいつも釣った魚を自分で料理にして食わせてくれるからさ、たまにはスカイのためだけに、この鈍った腕を振るわせてくれてもバチは当たらないんじゃないか？」

「セイちゃんだけのため……に……？」

「任せろ。このスカイお墨付きの大バカが、スカイのためだけに、バカ丁寧に、バカ正直に、

「世二代のバカ言いおさかな御膳をバカ真面目に作るからな！」

「く……、さすがに、根に持ちました？」

「今だけな。それとなスカイ」

「……はい？」

「女房の妬くほど亭主もてめせず。俺にはスカイしかいるわけないだろ」

「ミッー」

「よくまあこんなところにボツンと一軒家みたいなユースホステルがあるって知ってましたね」
さすがに唐突な強行軍でお互いに疲労が濃く、一時的にこじれた関係を戻した二人の「ちゃんとした寢床に潜りたい」という利害が一致し、ランデブー地点から最近の宿に来ていた。

「昔、そこそ中高生くらいのときに、ユースホステルはよく使って旅をした。まさかここが、当時の建物で当時のヘアレントによってまだ運営されているとは思わなかった」

「でもここらへん、波止もあれば磯もあるし浜もあるし溪流もあるし、釣れそうなポイントも見えた感じたくさんありそうで、それに釣船出してくれるところもあるみたいですね。セイちゃんここ気に入ってますよ？」

「また今度、……今度はちゃんと二人で来よう。……こちら辺は、俺が来ていた当時はバスの終点でターミナルがあつて、西からも南からも接続があつて、栄えているとまではいえなかったが結構拓けた町だったんだ」

「……それにしても、普通、ユースホステルって二段とか三段ベッドの相部屋で、厳格に男女別で、ダイニングでは強制的に交流会に参加して……って宿でしょう？ いいのかな男女で一部屋に入っちゃって……」

「スカイが云うユースホステルのスタイル、それはもう相当昔の話だな。今は多様性の時代だから、交流会には個を大事にしたいという旅行者を巻き込まないし、交流会自体を宿側の主催でやらないところも増えた。夫婦だとか家族だということが確実に部屋に余裕があれば、男女混合でもこうして同じ相部屋を事実上貸切で配置してくれる。そも結構前からビジネスホテルかと思うような完全個室のユースもあるくらいだぞ？」

「む……。また私の知らないあなたが出てきた」

「そう言われてもなあ。別に悪意で隠しているわけではないし、尋ねられれば隠し立てもせず話すけども、訊かれてもない過去のことでは始かれるのは、さすがに困るかな？」

「……ごめんなさい」

「うれしい。……さすがに今回は、俺に致命的なミスがないからフォローができない」

「……ね、あなた。隣に、寄り添っていいかな？」

「男女同室こそできるようになったとは云え、ユースホテルで不純は歓迎されないぞ？」

「不純じゃないもん。妻が愛する夫の隣にくっつくことは不純じゃないもん。だからセイちゃんを、あなたの隣に置いてください。いじわるしないで……」

「あのトリックスターも素直になるとこんなに強いんだな……そう勘ねるな、ほら、おいで」

「えへへ……。わたしのだけのあなたに、あなただけのわたしがくっつきますよ？」

そっと身を寄せ合いながらどちらが先ということもなく意識を手放して眠ってしまい、揃って鼻をグズグズさせながら這々^{はらはら}の体で店まで帰り、二人してまだ真新しいダブルベッドで高熱に浮かされながらしばらく唸っていたのは別の話になる。

【補足的サムシングのコーナー】

元トレーナーへの愛の一念が通じてこれでめでたしめでたしだと思った？ 残念！
ということ。

セイちゃんは想いを遂げると迷端に垂くなる説を提唱したい。

セイちゃんが家出した場所は、自宅兼店舗からおおよそ七百キロほど離れています。場所としては島根県の松江市（旧・美保関町）の七瀬港付近を想定。ここは隠岐諸島へと向かうフェリーの港があるのですが、境港の方が便利で栄えていることもあってひっそりしています。ただ、この付近にユースホステルはないのですが……。

この一件以降、セイちゃんの店では元トレーナーが食材管理まで含めて完全にキッチンを掌握することになりました。餅は餅屋に作らせるのがいちばん美味しいですからね！

新たな好敵手ができた日

「いやあ、今日はランチタイム、とっても落ち着いてましたねえ」

「そうだな、十一組十四人か。少ないな」

カウンターの中で大きな伸びをするエブロンドレスの彼女は、POSレジをのぞき込んで難しい顔をしているカマーエブロンの方を問いかけた。

「ここ最近は激戦場なので、いつもこうだと、セイちゃん案で嬉しいんですけど」

「案かもしれないが、売上の的には困るぞ。……もっと日替わりのインバクトが必要かな……。確かにアレじゃ写真映えるかといえば、地味で目立たないから……。うーむ……」

目頭を右手で摘まみながら眉間にしわを寄せて考え込んでいる夫の肩を、セイウンスカイは後ろから軽く抱いた。

「たまたま今日が落ち着いていただけですって。だって、あんなに美味しい料理、どこの誰が見捨てますかって話ですよ。それに昔から『慌てる食は賣いが少ない』って言うじゃないで

すか」

「しかしなあ、これはさすがに……。いつもはこの倍以上来ていただけるのに。おまけに今日は二十六日、一般的には給料日の翌日、しかも快晴で気温も申し分ない。客が増えることはあっても減ることはないはずなんだ」

「そういうの考えるのは、せめて店を閉めてからにしましょう？　ところであなた、今日はどんなに素敵なまかないがセイちゃんの前に並んでくれるんですか？」

「ん……。あ、そうだな、まかないだな。……準備してくるから、いつもの席で座って待っていて」
指を示して待っていた頬に寄せられた、少し荒れてかきついた唇の感触に相好を崩しながら、セイウンスカイは跳ねるような足取りで出入口に向かい『営業中』の札を返……。せなかつた。
「まだ大丈夫ですか？」

二人組の客が来たせいである。

いくらなんでも、今から最愛の夫とラブラブラランチだから帰れとも言えず、瞬時にバツと笑顔を作ったセイウンスカイは対応する。

「うん、そろそろお昼の休憩にしようかなって言うていただけたので、まだ全然、入っても問題ないよ。……奥の日当たりのいい席、あそこどうぞっ」

二人組を席に案内して奥の厨房に声をかける。

「二名様」来店ですよ！」

「……」めんなさいね、これから休憩という時間だったのに」

「あー、いいのいいの。今日はいつもよりお客さん少なくて、このままじゃお店潰れちゃうな
って話をしてたくらいだから、来てもらうのは大歓迎だよ？」

凸凹コンビといった感じだった。大柄だが可愛らしい笑顔の優しい雰囲気と、小柄で華奢で神経質な雰囲気。いずれも年齢は二十五を超えたかどうかといったウマ娘だ。その顔に覚えはないので初めての客だろう。そんな観察をしながらテキパキと冷水にしモンの輪切りを入れ
たジャグとグラス、そしてお手拭きを用意する。

「それじゃ、ご注文が決まったら呼んで——」

「あ、私はこの『日替わり・お腹いっぱい食べる幸せランチ』をください」

「……私はこの『日替わり・少しでも元気が出るランチ』で」

「はい。あとは、食後サードビスのドリンクはどうしますか？」

こちらはいずれも温かい紅茶のオーダーが入る。スパイスや果物などで着香したフレバード
でも問題ないとのことだ。それらを書き込んだ複写の伝票の控えをそのテーブルに置き、原本

を持つて厨房に入った。

「あなた、ご新規」名様、オーダー。幸せランチと元気ランチ。食後はあったかい紅茶でフレパードオツケー。見覚えがないからたぶん来店初めてのお客さん。よろしく」

「サンキュ、スカイ。初めてのお客様ならなおさら気合い入れないとな」

「それともうひとつオーダーがあつて、セイちゃんの生春巻き。お客さん的には、具材を堅くギュッと詰めてるのがお好みだそうです」

「え……？ はは、はいはい」

十秒間ほど包み込むように力一杯に抱き締められて、耳元に甘い言葉のトッピングまでオマケされて、満面の笑顔を浮かべる。

「セイちゃんも手伝う」

「じゃあ、幸せの方は雑穀米百二十五グラムにスプーン半分のゆかり。元気は白飯七十五グラムにスプーン三分の一のゆかり。準備して」

「はいはい」

仕込みがされてあらかたのところまでできているとはいえ、それでも細く間に料理が上がっ

てプレートの上に彩りが盛られていく。片方は見た目からふんだんにポリウムがあり、もう片方は一見しただけでは片方のポリウムを単に抑えただけに感じるが、シェフに云わせると明確に料理に使った材料や調理法が違い、だが色彩などを上手く考慮した結果、同じ料理の太盛りと小盛りに見えるだけでどちらを食べてもほぼ同程度の栄養素やカロリーを得られるという。たとえば雑穀米にも白飯にも赤紫蘇しそのふりかけを混ぜたのは色彩で雑穀を食べていると認識しにくくする工夫で、実質的において得られるカロリーはほぼ同等だそうだ。

「お待たせしましたー、こちらがお腹いっぱい食べる幸せランチ、こちらが少しでも元気が出るランチです」

給仕すると、大柄のウマ娘が胸の前で両手を組んで目を輝かせた。ヘルシーメニューと銘打っていたので、もっと量が少ないものと見横もっていて大きな嬉しい誤算を生じたのだろう。華奢なウマ娘もプレートを見比べて、その二つがほぼ同量の栄養素を含んでいるということに驚きを感じたのが、無関心を装いつつもほんの少し目を見開いたのが確認できた。

その様子を、テーブルから引き下がってから奥の厨房にいる夫に報告する。

「二人とも、美味しそうに食べてるよ。……でもなんか、心なしかだけど、懐かしそうな雰囲気も出てるけど」

「ほう……？　どんなお客様だ？」

「二人ともウマ娘。歳はたぶんどちらも二十五くらいかな。大柄で優しそうな子と華奢まげでナーバスそうな子だよ」

「……ん？　ウマ娘で、二十代半ばで、大柄と華奢……。もしかすると、華奢の方はサウスボ―だったんじゃないか？」

「……お箸を左で持ってるから、そうかも」

「そうか」

洗った包丁を布巾で拭きながら彼は言う。

「七年ほど前までチームで担当した子達だ」

「やあ、久しぶりだなラビとトリ。元気そうで良かった」

「あー！　やっぱりトレーナーさんだ！」　「無沙汰しています！」

食後の紅茶を持って給仕に來た彼を見て、大柄のウマ娘、ラビッドラビットのトレードマークのような笑顔がさらに輝いた。

「種もる話もあるでしょうし、ちょっとお話ししてきていいですよ」

そう妻に言われたので、別のテーブルから椅子を引き寄せて、断りを入れてからそこに座る。「もう指導の手を離れた上でこういうことを言うのはなんだが、ラビは少しふくよかになったし、逆にトリはまだ小さくなったな……」

「しかたないやん。食事は苦行。そもそもが食べたないんやから、もっとしっかり食べろとか言わたかて、困るわ……」

華奢な方、オートリヘブバーンが口を真一文字に締めて少し顔を背けた。

「その割にはトリちゃん、トレーナーさんのごはん、おいしいおいしくて食べたじゃない」「何言うんよつべ！ そんなんちゃう、そんなんちゃうから……！」

その様子を影からセイウンスカイは見ている。

話をしてこいと送り出しはしたものの、自分の半分ほどの若いウマ娘、しかもどちらも非凡な容顔だ。気にならないわけがなかった。

「しかし、わざわざ来てくれたのか、ありがとう」

「このまえ同窓会があつて、そこでこのお店の噂を聞いたの。定年退職したトレーナーさんがここで喫茶店を開いてるって！」

「いや……それはちょっと違うな。さっきウエイトレスをしていたウマ娘がいるだろう？ こ

「こは彼女の店で、俺はここに世話になっている雇われだ」

「その割には、そのオーナーとえらい仲良さそうでしたやん？」

「あ……ああ……うん。それはそうかもしれないな。その、彼女は妻だから……」

「奥様？ えっトレーナーさんご結婚されてたんですか？ ストイックな人だから、生涯独身を貫かれるのかと思ってたのですが……」

「ストイック……かな。確かに結婚なんて俺には無縁だと思って考えだにしていなかったけれど、それ以外についてはそこまで無欲ではないつもりだが。……恥ずかしながら老いるの恋とかいうやつでな……まだ入籍して五ヶ月も経っていない」

「なんなんそれ……。あの人だれなん？」

「誰と言われても。……彼女が現役だったのは四十年近く前だからラビもトリも知らないかもしれないけど、セイウンスカイ」

「セイウンスカイ……って、皐月と菊花をもぎ取ったあの黄金世代二冠のですか？」

「ラビッドラビットの素っ頓狂な声に頷く。

「彼女はトレーナーとしてトレンセンに行って初めて指導をした子だね。まあ、うん、いろいろ紆余曲折があつて、お互いにこんな歳になってからの入籍なんだが……」

「そんなん、そんなんイヤや。赦されへん！」

話を聞きながらかすかに震えていたオートリへブパーンと呼ばれた華奢な方が激昂した。

「そんなウマ娘、もう子どもかて出来へんのに。ババアやし。アカン！」

……グラスが砕ける申高い音がした。

床にそれを叩きつけたのは、……彼だった。

「トリ。……いま、お前、聞き捨てならないことを言ったな？」

普段柔らかい音が怒ることほど怖いものはない。今がそれだった。

「もう子を産めないババアだからどうした？ 商品価値のないゴミだとも言いいたいのか」
スツと立ち上がる。握りしめた拳が震えていた。

「今のお前は子どもを産めるだろう。ババアという歳でもない。確かにスカイよりはるかに魅力的なのだろう、生物学的な観点のみで云えばな。でもなあ、俺にとってみればそんなお前の方がよっぽど何の価値もないゴミだ。そんなゴミからのおこぼれにすぎってまで生きる屈辱なんかは微塵も感じない。その施しに縋らなきゃ生きられない命なら今すぐでも死んでやる。それだけだ。……さあ、食って飲んで気が済んだらもう帰ってくれ」

これで話は終わったという雰囲気、テーブルの会計票を破ってから厨房へ引き返す。

「……あこ」

「……見ていたのかスカイ。ごめんな。……少しだけ頭を冷やしてくる。アフタヌーンティの営業までには帰ってくるよ……」

愛妻の髪を愛おしそうにくしゃっと撫でて、その存在を確かめるように腕に強く抱き締めてから、ふっと奥へ引込んでしまった。

「ええっと……」

心底申し訳なさそうな表情で、そのテーブルの横にセイフンスカイは立った。泣きじゃくるオートリヘブバーンにいたたまれない表情のラビッドラビット。端的に言って地獄絵巻だ。

「一般常識で考えれば、こんな老朽ちやった私に商品価値なんてもうないから。至極当然の事実だようん。私は怒っていないから、ね？」

先刻まで夫が座った椅子に腰掛ける。

「あの人が好きなんだね。……さすがにあそこまで言われると……悔しかったよね、「ごめん」うるさい！ 勝者が余裕ぶっこいて、敗者をいたぶるみたいに哀れまんといて！」

「トリちゃん！ この期に及んでなんて酷いことを言うの？」

涙を浮かべながら親友を制するラビッドラビットに両の掌を見せてなだめてから、セイウンスカイはもう一度オートリヘパバーンに向いた。

「……私のことを勝者って言うけど、どうなのかな？ 三十六年もみつともなくズルズルと心の中に引きずって、苦しんで、そのくせ何も行動しなくって、心の中で想っていればいいなんて負け犬みたいに吠えて、卑屈になってた私だよ？ もしあの人と結ばれた現状を勝ちだと定義するとしても……何も誇るものがない、心底格好悪い勝ちだよこんなの……」

そっとトリの頭に手を伸ばした。手は、振り払われなかった。

「ずっとずっと未練がましくて、諦められなかった私ができることではないかもしれないけど、あの人より素敵な人がいると思う。あなたにはその人を連れてまたここに来て、私に地団駄踏ませて悔しがらせてほしいかな」

「……覚えとき。……絶対に、絶対に、アンタをコテンパンに潰しに来るから。覚悟しとき」
涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げたが、その瞳には晴れやかな光が宿っていた。

「潰すときまで二度と来るなんてことは、私はこの店のオーナーとして言わないよ。普通にいつでも、またこはん食べに来てね。あの人だって売り言葉に買い言葉であんな過激なことを言っただけで、あの人の性根は、担当した教え子を妄信的に溺愛しちゃうような、そんなおバ

かなクソボケのトレーナーだから」

「……あそこまでどうしようもないクソボケやとは思ってへんかった、さすがに幻滅したわ。」

……せやね、奥さんの言わはる通りやわ。戦に出るときにはしっかり食べて性根据えなアカンからね。……拒食やった私をずっと走り続けられるくらいに育てたあのこはんは、これからも食べなこのレースにも勝たれへん……！ 作ってるんがあのかクソボケかっていうんだけが、なんや悔しいけど」

「私も過食で苦しんだときに、トレーナーさんのこのごはんで救われたから。また来ます。おいしくて懐かしくて、またこれが食べられたのが嬉しい。でもお代はどうしたら……？」
ピリピリに引き裂かれた会計票。

「今日はもういいよ、私のおごりってことで。……その、私はお代は要らないと思ってはいないんだけど、今日は私にまた、こんなに手強いライバルができた日だから、ね？」

三者三様に泣き笑い。怒から差し込むお日様だけが穏やかにそれを眺めていた。

「補足的サムシングの定例コーナー」

モブウマ娘を一人出しました。彼女たちの大まかな感じを。

「オートリヘブバーン」(Octavi Heburn)

大阪井ウマ娘ということ、スクリーンの妖精オードリー・ヘブバーンの名前を文字って大阪府堺市の大神社「大鳥神社」の「オートリ」に置き換え。小柄で細い子。割とタマモクロスっぽい感じがなくもないですが。

ツンデレ気質でトレーナーにも突進(つっせん)態度を常日頃から取っていましたが、何を言おうが泰然(たいぜん)自若(じじやく)として柳に風と受け流し、それでいてしっかりと主張したいことを汲んでその方向にソフトランディングさせてくれるという、齡と苦勞を重ねたが故に可能なスキルに参ってしまった本案件での被害者。

なので、今回スカイのことを「子どもも出来ないババア」と言ってしまったことで初めて虎の尾を踏んでしまいました……。可哀相に。

「ラビット」 (Rapid Rabbit)

ラビットは「迅速な」を意味し、ラビットは「野ウサギ」から。

ヒシアケボノほどではないですが、大柄な子です。どこがウサギやねん、という誹謗は受けてきたけど明るく慈愛に満ちた目で笑ってる子。体軀はともかく愛嬌は十分にウサギの風格です。

前のトレーナーのところで過度にタイムを追い詰められて過食になり一気に太ってしまい、食事や栄養管理も含めて面倒を見ると評判だった元セイトレのチームに移籍してきた経緯があります。

とても心優しく現役中は「自分が勝つことで泣く子がいるのに勝っていいのか」ということで心を痛めたこともあります。そんな子に、このトレーナーは「ラビが勝てば俺が嬉しい。確かにあの子達は泣くかもしれないけれども、俺が喜ぶ顔で相殺できないか？」などと言っちゃいました。

そして本当に演技ではなく喜ぶので、それで脳が壊れて二十五歳になっても彼氏を作ることができなかった……つまり彼女も本案件での被害者です。

ただトレーナーの幸せは純粹に祝福しているので、彼女自身にも幸多かれ。

でもまあ、今回で最大の被害者は、店内備品（グラス）は壊されるわ、従業員に就業放棄はされるわ、仲裁はさせられるわ、まかないを食べ損ねるわ、売上は出ないわ、ババア呼ばわりされるわ、そもそも三十六年も待たされたわで、スカイかもしれません。

明日もまた青空の空回りなし

ちよつとセイちゃん、横になりますね

骨に触れたのかと。最初はそう思った。

場所をずらし、再度触れてみる。しかしそこも同じだった。

「な……なにこれ……？」

困惑する声と、快感を隠しきれない吐息。

「はあ……何と言われても……困る。俺の肩、としか……ああ……」

「いやいやいやいや、これ放置したらダメなやつでしょ。なんですかこの硬さは」

申し訳程度に薄いゴムマットを敷いた事務機の表面。それが愛してやまない夫の肩にあった。

「そう……なのか？」

軽く、ヘタヘタと触れているだけなのに、それですら滞留していた老廃物を大量に含んだ古い血液が動いてその部位に酸素と栄養を載せた新鮮な血液が届く快感を覚える程度に、誰がどう見てもダメな硬直。

「よくまあこんな凶暴なモノを持ちながら、臆面もなく現役時代の私に『身体はしつかり柔らかくしろ、怪我するぞ』なんてご高説を唱えたもんですね？ ……ちよつとセイちゃん、こればぐしますからね？ ちなみに、少なくともこの件に限って言えば、あなたに拒否する権限は一切ありません。返事はいかイエスです」

もそりとダブルベッドから半身を起こして、うつ伏せに転がした夫の背中に跨がる。下腹部に感じたその背中のこわばりも、およそヒトの身体とは想像したくない硬さだった。

しかし。安易にほぐすと言ったものの。

両方の肩甲骨を起点にその周辺、背筋、鎖骨周り、二の腕、首筋、後頭部、耳の後ろ。そのどこを探っても鼠一匹入り込めない鉄壁の防御、比較的にここが柔らかいのでここから徐々に弛めていこうと思えるポイントが見つからない。軽い力で頸動脈を十秒も圧迫するだけでヒトはあっさりと気絶すると聞いたことがあるが、これはもうアレだ、この人に限れば『軽い力で』圧迫した程度では血管はおそらく塞がらない。

「もうこれ、三十分や一時間揉んだからといってどうにかなるレベルの話じゃないですね。よく病院なんかで使う、最悪の状態を十としたときの段階でいえば間違いない五十より上です」「え……そんなに……？」

「どうしてこんなになるまで黙ってたんですか。確かにあなたから見たら頼りないかもしれませんが、私、それでもあなたの妻なんですよ？」

「ああ、泣くな泣くな」

声に湿りを感じて、慌てて下敷きにされていた方が言う。

「ごめんなスカイ。でもな、これ……。それこそ物心がついた頃からこうだからさ……」

「つまりこれがデフォルトだったから、これがとんでもない状態異常のステータスだと認識しなかったと？」

「あー、……つまり、そういうことになる」

「……そうですか。でももう認識できましたよね？　これが致命的な状態異常だと」

「……うん」

「その状態異常、セイちゃんが今から治しますね？」

「でももう十段階の五十より上なんだろう？」

「今すぐ治すとは言いませんでした。あなたの一生が終わるまでに、時間を掛けて、じっくり

丁寧に治します」

「それはありがたい……。な。よろしく頼む」

同所的な強い刺激で弛めることが不可能なら、広範に刺激を与えて少しづつ溶かすしかない。掌底を置いて、押して、それをぐりぐりと回して、それを延々と、延々と繰り返す。しばらくは甘美な吐息が聞こえていたが、やがて反応がなくなった。その代わりに穏やかな寝息が漏れていた。

「おはよう、スカイ。そろそろ起きたっていいんじゃないか？」

ハッと目を覚ます。寝室は既に明るく日が差していた。壁の時計は無情にも十時をとうに過ぎていた。

「えっ、えっ？ ええっ！」

ガバリと跳ね起きる。

「も、モーニング営業！ 開けてない！」

「その心配はない。ちゃんと俺が開けて、さっき閉めてきた。だから今朝だけは簡易版のモーニングセットにはなってしまったけど。ランチ営業の仕込みはいつも通りだよ」

「なんでそのとき起こさなかったんですか……？」

「いや、俺が起きようとしたときに本気で起こしたんだが、俺の上に覆い被さったまままるで

起きなかつたじゃないか。しかも俺の背中によだれまで垂らしてさ……」

「ふええっ？」

「仕方がないから布団の中に戻して、寝てもらった」

そういえば施術をしている記憶はあるが、施術を終えた記憶がない。いくら籍を入れた夫とはいえ、大失態を曝したことに気づいて深くシーツをかぶる。

でも。そんなことは意にも介さずそのシーツに夫が潜り込み、羞恥で震えるスカイの身体がそっと包まれる。

「そもそも、どうしてスカイが昨晚肩に触れてきたのか。その理由に思い当たってね。ああ、そういえばそちらの問題についてはまったく解決させてなかつたよな、って思った。……今から求めても、いいかな？」

「……いじわる」

「疲れてたのかな。普段ならあんなあからさまなコンタクトを取る前に気づいてやれてたんだけど、ごめんな」

【補足的サムシングのコーナー】

最初はマッサージをしようなんて微塵も考えてなかったセイちゃん。ちよつと人肌が恋しくなつて（意味深）夫にそのサインを送ろうとしたまで。いつもはセイちゃんから直接的なサインを送らなくても、それを敏感に察知して『夫がガツガツ求めてくるからしかたなく』受け入れるという体裁をセイちゃん側に繕わせてくれたのですが、あまりの過労でしばらく音沙汰がなくて、セイちゃんがたまりかねてしまった模様。

これが私の毎日のつまらない日常

午前五時。

枕元の古風なゼンマイ仕掛けの目覚まし時計がけたたましく鳴り響き、渋々起きる。あの人と一緒に暮らすようになって新調したダブルベッドだけれど、隣にあの人はいない。そっとその辺を手で探ってみても、もうそこに温もりは残ってすらいなかった。……だから、毎朝やっぱり、起きるのは少しだけ悲しくなる。あの人の温もりと匂いに包まれて起きるといふ幸せを一度でも知ってしまった身だから。でもこれは、時間という誰も抗うことができない祟りのせい。しかたがないことだから。

目を擦りながら枕頭台の魔法瓶を開けてひとくち。まだ冷たさが保たれた水が喉を通過して、体中に染み渡って、少し意識がすっきりと。

かすかに青魚が焼けているような匂いがしている。私は傍らのカーディガンに袖を通して、スリッパをバタバタ鳴らしながら階下へ降りる。

「おはよう、よく眠れた？」

「おはようあなた、おかげさまで昨晩もぐっすり。……今朝はサバ？」

「エグザクトリー。最初は味噌煮にしようかとも思ったんだけど、味噌煮に味噌汁はさすがに
どうかなと思ってね」

青い煙を上げていた焼網の切身がお皿へと大根おろしの配偶者と一緒に蒸気揚々とお引越
し。土鍋からお茶碗へよそわれた銀色のごはん。白菜とシメジのシンプルなお味噌汁は湯気を
煙らし、卵焼きには私の好みに合わせて甘くしてくれている上から少量のお醤油。小鉢に茗荷
の甘酢漬けと、湯呑みに熱々のほうじ茶。

それがちゃぶ台に並ぶと、あの人はテレビの電源を切った。それは彼のこだわりで、家族と
の時間を大事にするために、耳だけでなく目まで持って行かれるテレビに仕事をさせながら食
卓を囲むなど言語道断だという方針。逆にどうしても見たい番組があるなら、録画したもの
後から見るか食事はその前後にすらすらという徹底ぶり。私もそれなりに長く生きているつもり
だけど、プロ野球オールスター戦のナイター生中継をリアルタイムでは見ずに録画して、次の
日の昼に画面にかぶりつくように見るといふ人がこの世に存在するとはこのときまで想像すら
できなかった。……そういえばこれって、あの野球好きのメジロマックイーンさんやシュヴァ

ルグランさんならなんと言うのかな。……そして本当は、この時間には十五分の釣り情報番組があるから、折角この時間に起きているなら見たいのだけれど、といつてもそれは、別にこの人のこだわりを曲げてまで見なければならぬほどの価値があるかといえどもそこまでではない。ネットの動画サイトでそれこそ後から見ることでもできるし。私は昔から出来が良いので、そんなつまらない意地を張ることによるベネフィットが受けるダメージに較べて酷く小さいことくらい知っているんだ。

「さ、召し上げれ」

「いただきます」

あまり過去について詮索したことはないし、これからも特段する気はないけれど、この人はたぶん、良い家に生まれたんじゃないかなとは常々思う。もつともお互いにもう結婚を報告してリアルタイムにその反応を見ることが出来る年長はいないので、詮索しない限り知りようがない。それを知りたくないというのはワソだけれど、別に詳しく知らなくてもいまここにこの人が横で寄り添ってくれているという事実だけで私は十二分に果報者だし、その事実を知ったがためにその事実がこの距離をぐちゃぐちゃにしようかもしれないリスクを冒してまで知りたいとは思わない。あの人は私の生家の家庭環境が同期達と較べて芳しくないことを知った

上で、それでも求婚してくれたから必要以上に私はそのことを負い目に感じる必要はないと思うし、それはそれでいいとしても、私はあの人の過去をなにも知らずに妻の椅子に座ることができたわけで、もうここを誰にも譲りたくないし当然ながら私の命ある限りどこの誰にも譲る気なんかない。でも新事実という敵か味方がすらわからない存在は、その女王の座を永遠に強固なものにしてくれるかもしれない反面、いとも簡単に、そして冷酷に私を蹴落とせる力がある。だから私はあの人の過去を、あの人が自発的に話してくれるならともかく、無理に知らない方が良んだよ。……あ。ここでいう良い家というのは家柄だとか経済的に恵まれているという意味ではなくて、適切な距離感の家族から適切な教育や躾を受けたという育ちの意味で。正座を崩さず背筋も伸ばしてお箸が捌かれて、少なくとも私が肩をひそめるようなマナー違反をまるで犯さない。食べる、ハースだって私を見て、それより少しだけ早いくらいしてくれるから、ヘンに焦りを感じさせない。そして、私も魚を食べるのは上手な方だけれど、この人は私と同じくらい綺麗に食べる上にその所作まで綺麗なので、それはいつも悔しいなあ。

「いちそうさまでした、おいしかった……」

「どういたしまして、お粗末様でした」

私が手を合わせると、私が立ち上がる前に食器がスッと引かれてしまう。そしてそのまま流

しに立って、放置することなくすぐに洗って拭いて片付ける。さすが栄養士と調理師のダブル免許持ちのプロ、衛生管理の基礎中の基礎である3S、つまり「整理・整頓・清潔」をまったく疎かにしない人だ。でもおそらくこの人は、それを「しなければならぬ」なんてきつと微塵も思っていないところがすく……格好良い。

洗い場から戻ってくると、この人はすぐに店の調理場に立って、やりかけていた朝の仕込みを再開。朝に出すのは定番のモーニングプレートだから、少しふわとる感を残したスクランブルエッグを作って、サラダのための野菜を準備するくらいだよと簡単そうに言うけれど、この人がこの店の調理場を牛耳るようになって以降、間違いなくこの店の評価が格段に上がったことは認めざるを得ない事実だし、いっそ完全に彼の掌握下に置いた方が繁盛するかもしれない。でも私がそれを冗談でも提案すると、この人は烈火のごとく怒る。そんな簡単に自分の夢を他人に譲り渡すのか、って。口は災いの元。くわばらくわばら。

さっきまで丸のままごろんと置かれていたはずのレタスとキャベツとピーマンとニンジンが、誰がどう見てもドレッシングを掛ける直前のサラダに変わってる。あまりにも無駄も迷いもないスマートな包丁の動きに目を奪われてしまう。

「スカイ？　ずっと見てるけど、フロアの掃除は終わってる？」

今度はそのサラダのドレッシングソースを作りながら、彼からの指摘。

「おおっと、あまりにも鮮やかで、そして艶やかなその所作に見とれたせいで、コロッと忘れてました」

「そうか。こんなもん秘密にするようなことじゃないから望むならいくらでも見せてやるけど、でももう五分は時間を無駄にしてるぞ。時間を巻いてよろしく」

「はい、セイちゃんちよつと本気出しますね」

……ははっ、今までの私なら『えー、昨日の閉店後にしてるから大丈夫でしょ?』とか言ってたよね。でも今のセイちゃんはそのセリフだけは言えないんだな……。あの人はあそこまで、籍が入って同じ家族になったとは云え他人である私の店に対して妥協をしないのに、店主たる私が安易に妥協するなんて私の負けず嫌いが許さない。自分だけの夢なら案外簡単に諦めがつくけど、あんなに粉骨砕身で夢を支えてくれる人を見てはおそれを裏切れない。

まずは埃が溜まりそうな場所をはたき掛け。雑巾で窓を拭き、金具の部分は研磨剤のペーストをつけた布で磨く。カウンターと全部のテーブルをダスターで拭き上げたら什器備品の確認と補充、椅子の座面も掃除して、最後に床をモップ掛け! ほぼ毎朝していることなので、そこまで酷い汚れもない。となるとその状態の維持さえしてれば良いのでこれだけの掃除でもそ

こまで苦労はしない。

そうこうしていると仕込みを終えたあの人が、いつものカマーエプロン姿で外へ出ていく。暑くても寒くても雨でも雪でも風でもその日は営業するとなれば絶対に出る。天気が悪いからとか暑いから寒いからといって今日は中止するとかいう弱音は一切吐かない。壁に汚れがあればデッキブラシを振り上げて擦り取り、反射する自分の姿すら映らないくらいに外から窓をピカピカに磨き上げて植え込みの簡単な剪定と掃除、近所の人達との談笑も交えつつ街路の掃除を手早く終わらせてくれる。……今朝は『あれ』は落ちていなかった模様。……そう、その『あれ』こそが、彼に「スカイに外掃除をさせるなんてとんでもない」と言わしめた原因。それは……野良猫が戯れて飽きて放置したであろう鼠の残骸。最初それが何か気づかずには手摺みした私は、それがなにかを理解した次の瞬間、頓狂な絶叫を上げてパニックを起こして、我に戻ったら往来の中で通行人や近所の人の好奇の中で店から飛び出してきたあの人の胸の中にぎゅっと抱き締められて……ははっ、セイちゃん情けない。……でもそんな情けない私を鎮まるまで包み込んでくれるあの人はいろいろな面で規格外だと思う。だって、パニックを起こしたウマ娘をヒトが丸腰の単身で優しく鎮めるなんてこと自体が危険極まりない行為なのに、この人はそれを躊躇しなかった。それも他人の目をなにも気にせず。そしてこの件でだ

けは一切擲擲してこないから、もはや本当にこの件を忘れてるまであるかもしれない。ただ『外掃除はスカイはやらない』という暗黙のルールだけがあの人の脳味噌に残ってる。世間のヒトはそこまでウマ娘の怖さを知らない。二人や三人、無^ラ幸^ラのヒトに目も当てられない程度の重傷を負わせていた可能性だってあったのを、あの人のおかげで「鼠に驚いてパニックを起こしたいい歳のウマ娘が新婚の旦那の胸にすりついた」程度の笑い話で処理してくれたことは本当に感謝しかない。もちろん恥^ハずかしくてこんなこと本人には言わないけど。

そうこうして六時二十分、予定通りに全工程完了。

六時半に開店。開店の儀式として、私は小気味良い音を立ててあの人とハイタッチをするようにしている。お互いの健闘を祈るという意味で。家庭菜園の手入れや散歩や公園でのラジオ体操、毎朝の日課を終えた近所のお客さんが来てくれる。この人達のおかげで、ありがたいことにこの店の朝の売上は雨が降ろうが雪が降ろうが大きく落ち込まない。檐でも降れば別かもしれないけどね。

「おはようございますー！ いらっしやいませー！」

「おはよう、今日もこの店のオシドリは仲が良さそうだなあー！」

「ふふーん、おかげさまで！ なんてつたってまだまだ熱々の新婚なので！」

「はいはい」ごちそうさま！ もう朝メシ食わなくても腹一杯だから帰ろうかな！」

「待って待って今のなし！ 帰らないでえ！」

七時半くらいになるとこれから出勤の方が、八時半を過ぎた頃になると近くの病院勤務の夜勤明けの看護師さん達（時期によっては実習の看護学生さんらしい人を引き連れて）が来てくれる。だいたいは常連とまで云えなくても、それでも『いつもの』とかいうオーダーをされたって好みのお茶の銘柄、濃さ、ミルクの有無についてはちゃんと対応できるくらいには来ている人。

午前九時半にモーニング営業終了でいったん閉店。その時間を見計らってご近所の信用金庫の職員さんが来て、集計を済ませた前日の売上金を回収してくれる。ここを私が開業してからずっと私が持参して預金口座に入れていたのだけれど、最近は業績が伸びてそれなりの大口客と見込まれたのか、あるいはあの人が運営に加わったことで『あの喫茶店はしよせん女のオママゴト』と思わなくなったのか、あちらから回収に来てくれるようになった。昨今は治安が少し悪くなったし、いかに私がウマ娘といえそこその現金を提げて一人で街を歩くのは少し心細かったのだとても助かっている。一号店を出しませんか手頃な物件を知っていますよとか従業員を雇ってもっと手広い商売をしてはどうかとか、融資に繋がりたいとおぼしき勧誘は受ける

けど、あの人が上手く『考えときますね』なんて睨^{にら}めてくれる。……その『考えときます』って、大阪あたりでは確か提案者に角を立てない断り文句って聞いたことあるけど、それをこつち出身の職員さんが理解できているのかどうか。もちろん『あの件についてご検討頂きましたか?』なんて追撃が来ても、この人なら私に對してそうするみたいにな上手にカウンターを入れてくれるとは信じているけど。私がその話に興味を示して前向きにならない限りは。

お金を持った職員さんを見送ったらファイルに受取書を綴じて、カウンターに座って、市販のビスケットを摘まみながらあの人が淹れてくれるお茶をいただく。そのお茶の給仕までは彼は恭^{こうや}しくしてくれるけど、彼はそこからノートにつらつらと、ペンを走らせたらすぐに調理場に引込む。正午からのメインレースであるランチ営業の仕込み。私はそのノートを繰る。

毎日見開きの二ページを使ってあの人が書くのは、今日の日替わりランチの献立。大食漢向けの『たくさん食べてもカロリーや塩分を過剰摂取しないように配慮した大盛りのランチ』と、逆に食が細い人向けの『量は少なめだけれど必要な栄養をしっかりと取れるランチ』について書いてある。これの何が怖いって、見た目はどちらもほとんど変わらず、ただ大盛りか小盛りかの差にしか見えない上に、食べ比べたって味に大きく違いがあるようにすら感じないけれど、食材・調味料・調理方法を変えることによって『どちらもその見目にかかわらずほぼ同量の糖

質・脂質・蛋白質が摂取できるように仕上げてある』こと。最近になってようやく理解が追いついてきたけど、最初のうちは彼が何を言っているのかわからなかった。

私はノートを一読してからレシ横の棚からA4サイズのコピー用紙を取り、即席のPOPを作る。手慣れてきたのでこの作業は大体いつも十五分プラスマイナス五分の作業。文字だけでは寂しいのでイラストも描く。こればかりはさすがに技量的な面ではアグネスデジタルさんとかメジロドーベルさんにはまったく叶わないと思うけど、それでも毎日描いていると下手なりに妙な愛嬌がある絵ができてきて自画自賛してるしあの人も褒めてくれる。そしてそれをレーザー複合機でカラーコピーを取って、硬質タイプのクリアホルダーに挟んで各テーブルに置いておく。原本は彼の余白がなくなったノートと一緒に保管箱を作ってそこに片している。

十一時四十分。仕込みを終えた彼は少し疲れた顔でホールに出てくる。カウンターに座るそんな彼にねぎらいのお茶を給仕するのは、私の大事な仕事のひとつ。あまりに疲れが濃さそうな時は、隣に座ってちょっと腕を広げる仕事をしああげる。誘蛾灯に虫が寄ってくるように彼の頭が私の胸に落ちてくるから、それをきゅっと抱えてその髪に頬擦りしてあやす。三分もしたら腫のピン트가戻ってきて、また元気に厨房に立ってくれる。

正午から午後一時までは、この店のメインレースであるランチ営業ステークス。事前にある

程度の準備ができていた調理場と違い、ホールの作業は毎日シチュエーションが変化する出たとこ勝負。この店では、主にあちら側の要望で臨時に入ることであってもこちらの希望でアルバイトさんを入れることはしていないので、配下膳と会計とオーダーがブッキングすれば当然お客さんを待たせなきゃならない。でも、そういうシチュエーションではヘルプを頼む前にあの人々が調理場から出てきて私が届かないところをカバーしてくれる。一体全体どこにそういう状況を察知するための耳目を置いているのか、たまに怖くなることもある。

一時ラストオーダーで、大体いつもランチ終了の閉店が一時半前。それから二人でお気入りの席でまかないのランチ。この時間帯がもっともゆったりしているから、私連夫婦の会話が弾むのもここ。もっぱら私が話すばかりであの人はそれを黙って聞くばかりだけれど。でも、時折話題に対する質問が飛んできたり、その話題が彼にとっても興味があるものときは、少し身を乗り出し気味になるので、ちゃんと聞いてくれるんだってというのがとても嬉しい。

二時になったらお喋りの場は調理場に移す。オーブンを予熱して、その間に二人でクッキー生地を型抜き。さすがにこのマンパワーで本格的な手作り菓子を提供するところまでは回せないから、アフタヌーンティ営業で出すミルフィーユなどのケーキは既成の冷凍品を緩慢解凍（ゆるやかに解凍）したもので、こうやって型を抜いているクッキーも既成の冷凍品を成形して焼くだけ。もしかし

たら、マンハッタンカフェさんやエイシンフラッシュさんなんかはこたわりが凄そうだから、こういうのも粉からちゃんと作っているのかもしれないね。

午後三時から五時半までがアフタヌーンティ営業。もうこの時間はレース場の第十二レースみたいなもので、ランチ営業の熱狂をクールダウンする感じのまったり営業。食事もランチ営業で残ったものがある分はもったいないから惜しみなく出すけど、新たに作るどころまではやらなくて、基本は紅茶とコーヒー、一緒に作ったクッキーや解凍したケーキを提供するのに留めている。だから仕事帰りのお客さんがこれから徐々に増えるであろう五時半で店を閉めてしまふ。現役のトレセン生もここでお茶をしながら話の花を咲かせていることがあるけど、そんな娘達にも『そろそろ帰らないと寮の夕食に遅れるよ』と言えば素直に帰ってくれる。それは私なりの配慮のつもり。……だってあの、まだ夜も明けないうちからここまでずっと働きづめで、本来ならこのアフタヌーン営業すら私は店を開けることを頑なに反対し、ランチ終了後にクロージング作業をしてそこからはブライベートにしようと思っただけで、この件がおそらく結婚してからいちばん対立したことがなっているくらいバチバチになった。でも。

「スカイ、結婚前に俺に言ったじゃないか。『ここは喫茶店なんですよ？』って。モーニングとランチを今の態勢でやるだけじゃここは大衆食堂になってしまう。それならそんな可愛いエ

ブロードレス姿を客にお披露目せずに地味な割烹着でも着てなさい。それに、スカイがやりたかったのは喫茶店だったんじゃないのか？ 大衆食堂だったのか？」

「あー……もう、わかりましたよ、私の負けです。あなたはそんなに私の影として働きたいんですね？　じゃあもうずっと奴隷のように働いてもらおうじゃないですか。……でもアフタヌーンティ営業は、私のやりたい形で店を開けますからね？　□を採ませませんからね？」

そういう経緯から、こうなってる。あの人も大概頑固だけれど、私の負けず嫌いも相当なものだったことはあの人だって知ってる。だから私の意図を汲んでくれて、ランチの残り福が注文されることを含んだイレギュラーが発生しない限りは、彼には調理場の折りたたみ椅子で、小さなモバイルパソコンで好きな映画を見てもらったり、そんな時間を作った。

いろいろなものを見て楽しんでくれているみたい。映画の製作国を問わず、アクションからサスペンス、SF、時代物。最近は私が何気なく薦めた釣りバカ日誌を見てくれている。……そういえば先日は私が焼いたクッキーを取りに調理場に行ったらいつもは反応して手を振ったりしてくるのに、そのときは珍しく食い入るように画面を見ていて気づかない様子だったから、なにをそんな熱心に見ているんだろうと後ろからのぞき込んだらふっくらい映像。

「……場の上空とおなじ！　青空！　京都レース場今日は青空！」

画像の先頭に映っているのは、……若かりし私！

「なにを見てるんですか！」

「何って、え……？ スカイの菊花賞……」

キョトンとした表情で当惑する姿の後ろから、思わず私はモバイルパソコンの蓋をボタンと閉めましたよ。

「すけべ、変態、えっち！ 若い私のあられもない姿でお店の中で欲情するなんて最低！」

「は？ いや、えっと……？」

思えばあれは気が動転したからだとは云え悪いことをしたなど。動転したままフロアに出たけど、嬉しさというのは遅効性で、未だにあのレースを覚えていて見返してくれて、しかも結末知ってるのに熱くなってるあの人に胸がいっぱいになっちゃって、かなり気持ちの悪い二へ二へとした顔で接客してたんだと思う。……そんなことは黒歴史だからもう喋るのやめるけど。ええっと、ああそうそう、アフタヌーン営業の終わりのところだっけ。

店を閉めたら徹底的に掃除をする。朝の掃除は気持ちよくお客さんを迎え入れるための儀式だけど、夕の掃除は落ちた食べこぼしや食材の端切れを徹底的に排除して害獣害虫を寄せ付けないための手続き。意味合いが違ってから手抜きは赦されない。とはいえフロアはまだ案で一時

間ちよつともすればOKだけど、調理場を^{そと}与るあの人は洗い場のかすかな水垢や排水口の又メリすら見逃さないで綺麗に磨き上げて、塩素漂白剤やアルコールを使ってピカピカになるまでやるから、その倍どころの騒ぎじゃない。私がここを買ったときより綺麗な調理場って、器具什器の総交換以外の何をやればそういう逆転現象が起こるのか、率直に言ってちよつと理解ができなくて、あれはあの人が掛けた魔法だと思ってる。そしてその掃除を終えたらあの人は明日の食材を買いに出かけていく。穀類や調味料や冷凍品などの食材を定期的に発注して届けられる契約の食品商社があるけれど、そしてそこからも日々の野菜や精肉などに関しても任せてもらいたいというラブコールがあるけれど、あの人は、生鮮品だけは自分で見て良いものを仕入りたいし実際に売物を見ないと毎日の日替わりの献立は考えられないと、それを悉く袖にしている。私も影でお任せしたらと言ってみたら、この人は「それがスカイの意向なら……」とか言い出す。あの人は私を支援することが至上の喜びみたいだけど、それはあなただけの特権じゃないんだって、ちよつと強く叱ったかな。あの人が私を、この店を最良にしようと考えてくれたことに、私はケチを付けるわけがないんだから。

そういうわけで、二人の夕飯を作るのは時間が空いている私の役目。免許持ちのあの人に較べたら、どんなに頑張ったって情けなくて泣きたくなくなるくらい稚拙な献立。それでもあの人が

私の用意した食事について不平不満を言ったことは一度もない（味付けなんかに的確な助言をすることはよくある）し、最後の一掬いに至るまで絶対に残さしないで食べてくれるから、少しはあの人の慰めになってくれているのかなって自己解決できてる。

その後のこと……は、プライベートな時間なので……。

どうしても言え？　そこでツルちゃんは大きく頷かないでくださいよ、ツルちゃんだけは私の味方じゃないんですか？

……はあ。ええいもう！　こういうことが聞きたいんですよ！　お風呂は二人で一緒に入ってますっ！

……一般のご家庭のお風呂だから広くないし、片方がお湯に浸かっているときは片方が髪や身体を洗って、それが終わったら交代して。うう……。

ボディソープとシャンプーの銘柄あ？　そこまで答えなきゃだめ？

……普通の赤い箱の石鹸ですよ。髪も。たまにあの人が洗ってくれる。しなやかに指で揉むように洗ってくれるから、ついウトウトしちゃいそうなくらい気持ちよくて。

石鹸で髪を洗っててこわつかなかった？　そうだね、洗った直後は軋むけど、そのあとお酢を薄めたのでトリートメントすれば、石鹸で汚れは取れるし地肌もスッキリするし、お酢で

キューティクルが締まるからか髪も綺麗になるし。そのせいか、最近の私の猫毛つばさが少し薄れてきて、少しでもシットリつやつやになってきてるんだよ？

……はい！ お風呂の話はここまで！

……そのあとは、寝室で一緒に少し話をするんだけど、臨戦態勢から解放されて、その上お風呂でリセットされてるから、あの人は九時過ぎにはもう力尽きて寝ちゃってる。さすがに私の現役トレーナーだった頃の無尽蔵の体力から較べたら酷だろうけど、そこはさすがに歳を感じちゃうね。徐々に私の話に対する相槌や返答がぼやぼやしてくるからそれが合図で、そこから私も話をするペースを徐々に下げて、寝ちゃった後に肩に毛布を掛けてあげて、その寝顔をみるのは好き。この顔を見られるのは私だけの特権なんだ、って思うとね。

……それを毎日毎日繰り返しているだけのつまらない日常だよ……ってなんでみんな、そんな呆れた顔してるの？ ねえ？

【いつもの補足的コーナー】

セイちゃん視点からの『サンセット・ムーンライズ』での一日を見てみました。

久しぶりに黄金世代の面々と、数十年ぶりの修学旅行と称して温泉に行き、元トレーナーの旦那との熱烈な恋バナを語り合う会でスヘちゃんあたりに水を向けられて話した内容、という感じで、セイちゃんの一人称視点で固定して書いてみました。

なお、次の『青空に曝された幸福』は逆に、元セイトシ視点から見ていきます。

明日もまた青空の空回りなし

青空に囁かれた幸福

目を覚ますと朝の三時の少し前という時刻だった。そういえば、午前三時は『夜の』三時か『朝の』三時かで議論を交わしたことがあった。何故か朝派の仲間が予想以上に少なく、その議論では数の暴力で負けたつけ。でも俺はそれでも頑なに『朝の三時』を使い続ける。

隣に横たわる影を見る。俺のシャツの裾を軽く摘まんだまま無防備に薄く微笑んで、規則的にすすすうと寝息を立てている俺ではない別の影。薄暗い光の中、手でそっとその前髪を上げて顔を晒し、そこにそっと唇を添える。

「お前も朝派の仲間だもんな、スカイ」

「ん……むう……」

可愛い寝言を口の中でもこもこ言いながら、まだ心地よい夢の中にいる妻を見ると「気持ちいかなになる。いつまでもこうして過ごしたいが、そうもいかない浮世だ。名残惜しいがそっと身体を離し、ベッドから出る。なつめ球の灯りの下、あらがじめ用意しておいた

替えの衣服を着て、そつと足音を殺して階下に降りる。

二時頃に来るトラックが降りてくれた食材を検品して厨房に入れる。今日も過不足はないし、納品された食材に瑕疵はない。在庫を管理する厨房のタブレットに納められた品の登録をする。冷凍庫から氷を一掴み持ち出して手洗場に行き、蛇口をひねって溜めた水道水にその氷を投じる。二分ほどの時間を待ち、その冷水に手を入れ掬って顔を洗う。ヒヤッとする感覚で完全に目を覚ますためのおまじないのようなものだ。歯を磨き髭を剃り、肘の下まで手を急入りに洗うと、厨房に取って返して冷蔵庫から野菜と鶏卵、冷凍室から鶏の胸肉とむきエビのボイルを出す。今日のモーニングプレートに使う食材だ。むきエビを使ってほのかにピラフにし、玉子と鶏は綴じてピラフの餡にする。野菜は適当にカットしてサラダにする。ここに紅茶かコーヒーを添えればそれなりの格好がつくという計画。むろん適当にトーストを焼き卵は茹でておいてそこに野菜サラダを添えておけば喫茶店のモーニングプレートの格好はつくが、それではどこの喫茶店でも食えるレバトリリーになってしまう。確かにそのレバトリリーから外れようとすれば手間がかかるが、このモーニングは『サンセット・ムーンライズ』だから食べられる、という付加価値を用意するためのコストがこの程度のものであるならば、俺はそれを惜しみたくない。

鶏胸肉は真空パックのまま水を張った鍋に入れてゆつくりと沸騰させていく。その間に米を研いでバターとオリーブ油で炒め、冷凍のむきエビは臭味を消すために酒に漬ける。野菜はあまり早くからカットすると鮮度が急激に落ちるのでまだ手を着けない。

炒めた米にむきエビを加えてジャーに入れ調味料を振って炊飯を開始、鶏胸肉の鍋は火を切って低温でじつくりと熱を通す。……さて、今度は女神に捧げる食事を用意しなければ。

店の厨房から自宅の厨房に場所を変える。

冷凍の鯖のフィッシュを二枚出して酒を振り塩をほんの少し追加する。このメーカーのフィッシュが少なくともこの辺の店で買える中ではいちばん旨いのだが、若干塩味が足りない。便利な世の中になったもので、大根おろしは最近では既に下ろしたものがチューブに入って売られている。研いだ米に昆布を入れ、一滴の菜種油を垂らした土鍋を火に掛ける。白菜とシメジを処理して昆布を入れた鍋を火に掛け、シメジもこの時点で入れておく。ある程度煮立ってきたのを確認して白菜を入れ、昆布を取り、味噌を溶き、隠しにごく少量の醤油を落とす。出した昆布はまだ浸み出していない旨味をフル活用するために、ある程度貯まれば佃煮を作るので捨てず、軽く洗い保存容器に入る大きさに揃えて冷凍室に収める。鉢に卵を割り入れて味噌を少し垂らして菜箸でかき混ぜる。砂糖でも良いのだが味噌のほうが味に深みが出るから。そしてあ

まりガチャガチャとかき回さない。どこを取っても均等に白身と黄身が混ざっているのを決して悪いとは言わないが、粗めにして白身と黄身のコントラストを設けることで白身のプリッとした食感と黄身の濃い味を残すのが目的だ。

そうしているうちにガチャガチャと牛乳瓶が擦れる音を交えたバイクのエンジンの排気が聞こえてくる。そろそろ五時。上階の目覚まし時計が鳴る時刻。こちらもそろそろ仕上げにかかると。鯖のフィッシュを焼網に載せる。うつすらと立ち上る青い煙。その横で用意した卵液を焼いていく。

バタバタとスリッパを鳴らす音が近づいてくる。

「おはよう、よく眠れた？」

「おはようあなた、おかげさまで昨晚もぐっすり。……今朝はサバ？」

「エグザクトリー。最初は味噌煮にしようかとも思ったんだけど、味噌煮に味噌汁はさすがにどうかなと思うてね」

私は全然そんなこと気にしないのにな、という表情を見て、そこに座つてるとジエスチャーしてラストスパート。最後に小鉢に茗荷みょうがの甘酢漬けを用意し沸かしたばかりのお湯でほうじ茶を淹れる。

それらをちゃぶ台に並べ、時計代わりに点けておいたテレビを切る。本当は知っている。この時間帯に釣りの情報番組があること、それを本当はスカイは見たいのだということを。けれど、折角作った朝食を、いちばん暑い時間に他に気を取られずに食べてもらいたいという俺の工口を、スカイは何ひとつの不満も漏らさずに受け入れてくれる。

「さ、召し上げれ」

「いただきます」

やはり作ったからには箸が進むかどうかは気になるもので、いつもその食べ始めの箸の動きを注視してしまう。だが今朝も箸の動きに躊躇が生じることはなく、次々に手を着けてくれていることに安堵しつつ、自分の箸を動かし始める。

「こちそうさまでした、おいしかった……」

「どういたしまして、お粗末様でした」

スカイが箸を置いて手を含わせると、食器は綺麗に片付いている。嬉しい話だ。

この後、店主であるスカイには昨日の売上金を集計して今日の釣銭を準備する作業がある。小額の間違いでも許されない大事な任務。それを邪魔するわけにはいかない。俺は皿や椀を下げ、手早く洗って拭いて片付ける。

難しい顔をして金銭を扱うスカイの邪魔をしないように店の厨房に移動する。残りの仕込みを進めないと。

やがて集計などが終わったらしく、モーニングの後に来る信用金庫の職員に渡す売上金とその伝票、釣銭準備金を入れた巾着袋を抱えたスカイがフロアに向かう。POSレジに釣銭準備金を、その下の手提げ金庫に売上金を入れて……厨房に戻ってきた。興味津々という瞳。野菜をカットしているだけなんだが、そのどこに興味があるのだろうか。

「スカイ？　ずっと見てるけど、フロアの掃除は終わってる？」

「おあつと、あまりにも鮮やかで、そして艶やかあでなその所作に見とれたせいで、コロッと忘れてました」

「そうか。こんなもん秘密にすることじゃないから、スカイが望むならいつでもいくらでも見せてやるけど、でももう五分は時間を無駄にしてるぞ。時間を巻いてよろしくな」

「はい、セイちゃんちよっと本気出しますね」

鮮やかで艶やか、か。世辞としても褒められるのは悪い気分ではない。

仕込みが終わると、店の外を掃除する。

本来はフロアと店外の掃除はスカイの担当だったんだが、そういえばなんで店外の掃除が俺

の担当に変わったんだっただけ。なにか決定的なイベントがあった気がするが、記憶がない。記憶はないが、暑いつけ寒いにつけ、雨が降ろうが雪が降ろうが外に出なければ掃除はできないのだから、そんなところのキツイ仕事を愛妻に押しつける夫というのも自分の中の夫像としてはそぐわないし、むしろその程度はいくらでもスカイから任されたい。

「よし、今日も頑張ろうねあなた」

「よし、頑張ろうなスカイ」

お互いの右手をバァンと打ち鳴らすハイタッチ。戦闘開始だ。キッチンに引っ込んで気合いを入れていると、声が聞こえてくる。

「おはようございまーす！　いらつしやいませー！」

「おはよう、今日もこの店のオシドリは仲が良さそうだなあ！」

「ふふーん、おかげさまで！　なんてったってまだまだ熱々の新婚なので！」

「はいはいごちそうさま！　もう朝食済まなくても腹一杯だから帰ろうかな！」

「待って待って今のなし！　帰らないでえ！」

愛嬌を振りまいて接客をするスカイの声を聞いていると、こちらも俄然ファイトが湧いてくる。次々に舞い込んでくるオーダーを無心で捌く。まだ前哨戦だ。ここでキツイと言ってい

では昼が保たない。

「あなた、モーニングもう閉めるからね」

オーダーがなりを潜めたので流し台を洗っていると声がかかる。布巾で拭き上げてからフロアに向かうと、信用金庫の職員が来ている。あの支店の次長だとか言っていたように記憶しているの、おそらく俺より五つほど下だろうか。それでも還暦前後のはずで落ち着いていて当然の年齢だが、黙って見ていればあからさまにスカイに色目を使うことがあり気に入らない。

とはいえそいつは俺の女だと怒鳴りたいが、自分の感情の乱れだけを理由にこちらから喧嘩を売るわけにもいかない。スカイが明確に不快を覚えていれば話は変わるが、それを嫌がっている様子というよりもそもそも気づいている様子がないので、現時点であえて口を出すのは違うと思うが、俺が来る前にもっと露骨なアプローチをしていたのだろうか、ともすれば身体に触れるなどの行為もあったのかもしれないと思うと、もう六十の半ばを過ぎて落ち着かなければならない年齢だというのに嫉妬の念が渦巻いてしまう。業績拡大のために融資を受けないかといった話も持ちかけてくるが、スカイの心情がどうあれ、少なくともコイツの手柄になるような形で受けないから……！

ようやく帰っていった職員の出たドアに塩を撒き散らしたい気分を抑えつつ、カウンターに

座るスカイにお茶を淹れる。

「なにか、ちょっと不機嫌？」

「いや、そんなことはないよ？　どうして？」

「上手く説明はできないけど、……しいて言うなら女の勘？」

「勘ねえ。怖い怖い」

こちらだって上手く説明できる感情ではないけどな、と思いつつ、ビスケットを摘まみながら嬉しそうにカップを傾け無防備な笑顔を作るスカイをチラリと見て、献立ノートを広げる。

「今日のランチは……と」

もう前日に作るものがある程度決めて買い出しをしているが、その日の天候や気温、店の周囲でのイベントなどを勘案して調整し、最終的に決めるための手続きだ。昨日の買い出しでは鶏がとて安く出ている、品を見ればなかなか新鮮で上等だったので買ってきてある。まだ新しいので使い切れなかった分は自家消費に回すという手もあるし、短期なら冷凍して次の機会をうかがうこともできる。今日は地域の小学校が午前中で給食もなく授業終了なので、子連れの来客も見込まれる。となると子どもが喜びそうな献立を入れたいが、唐揚げは油を使うのでカロリーの……ううん、今日は立案に悩むな。

少し頭を悩ませたが、鶏の唐揚げや竜田揚げが嫌いだという人はあまり多くはない。調理中の破裂に気を遣う必要はあるが、さいの目にしたこんにゃくや高野豆腐の唐揚げも取り混ぜることにしよう。プレートあたりのタネの配合を少しずつ変えればカロリーがこうなつて脂質がこうで……いつもよりはブレが大きいが許容範囲だ、よし。

思いついたアイディアをノートに走らせると、昼の仕込みを始めると宣言して厨房に入る。ここからが俺の本領を全力で発揮するべき戦い。無心になる。

すべての食材の下拵もとづけえを終えると、情けないことに精根が尽きてヘトヘトになつてしまふ。まったく歳は取りたくないもので、すっかりスタミナがなくなつてしまった。

「はい。お茶、どうぞ」

スカイが目の前に給仕してくれるお茶は今日は温かい麦茶。喉から胃を経て全身にしみ通る優しく柔らかな感覚に大きな溜息を漏らす。

「お疲れさま。おいでおいで」

カウンターの客席側に回つて隣に座つたスカイが、少し恥じらうような顔で腕を広げる。その胸に頭をポテンと落とすと、両腕で抱き締めて頭に顔を寄せて髪に頬擦りしてくれる。十も年下の妻だが、もうこの歳になつてしまった俺は、そのスカイくらいにしか弱音を吐き甘

えられるような存在はいない。スカイはあまり豊かな胸の持ち主ではないが、すべての邪念が溶けていくような安心感に縋りつく、もう少し、あと少し頑張るための気力が出てくる。

「ありがとスカイ。頑張ってくる」

「にゃは、現金なんだから」

少しおどけるスカイの頭をくしゃつと撫でて、再び戦場に飛び込む。

さあ、ここから『サンセット・ムーンライズ』のメインレースだ。五口の焔炉（ひかり）を点火し、盛り付けるためのプレートを増み上げる。さあ来い、片っ端からぶっ潰してやる。

……積み上げたプレートが残り数枚になる頃には状況が落ち着いてくる。スカイが厨房に顔を覗かせて、最後の客が退店したことを告げる。しっかり数えていないが、今日のランチも予想した程度の数が出たようだ。

唐揚げをひとくちサイズにカットして甘酢の餡を上からたっぷり注ぎ、プレートを二枚持つていつもの席に向かう。

「今日のまかないは油淋鶏（やうりんてい）？ お客さんのランチの唐揚げを運びながら、今日のはおいしそうだなって思っていたけど、これはもっと魅力的じゃないですかあ！」

「気をつけるよ？ あまりがつつくと……」

「あつっうー！」

「……火傷するぞと言いたかったんだけどなあ、遅かったか」

冷水のグラスを差し出す。スカイはそれをひったくるように受け取って飲み干す。

「……でも、おいしい」

「そっか。料理人冥利に尽きる感想をありがとう」

食事が終わるとプレートを下げ、冷凍庫の市販のカップのラクトアイスをガラスの器に盛りつけて、上から糖蜜を垂らして戻る。

「今日のまかないランチはデザートつきでしたか！」

「市販のラクトアイスだけだな？」

「上等、上等」

匙の甘味をニコニコしながら頬張って、スカイはいろいろな話をしてくれる。最近の変わったこと、トレセン学園でのかつての同期達の近況、天気のこと、釣りの情報、コンビニの新商品、お客のエピソード、町内会の奉仕活動の予定、最近気になるアイテム……。担当ウマ娘のトレーニングのことしか考えてこなかった俺にとって、スカイの話はとても面白い。そして上機嫌で鈍舌な口を遮る理由もないので、この時間は本当にありがたい。

二時になると彼女の独演会は厨房で第二部。市販のクッキー生地を型抜きし、上から溶かしバターや卵液を塗ってオープンで焼いていく。料理については一言ある俺も、製菓になると強くはない。その辺はやはり女性であるスカイの方が詳しいし、女性らしい可愛さがセンスとして表出してくる。

三時になるとアフタヌーンティの営業。ここで俺はお役御免になる。……元々、スカイはこの営業を頑なに反対した。俺を働き過ぎだと断罪し、ランチの営業が終わればそのままクロージングをして夫婦のプライベートの時間を持とうと。だが彼女がやりたかったのは喫茶店であって大衆食堂ではない。もっとも店が喫茶店として輝く時間を捨てることに俺は反対し、一時期かなりギスギスしたが、スカイがアフタヌーンティ営業を飲んだ代わりに、俺には厨房で映画でも見てるといふ譲歩案を出してきた。少し思っていた感じとは違う結果になったものの、それでスカイが納得するならと、俺はこの時間帯を休憩に宛てる。……そういえばスカイの在りし日の菊花賞の映像を見ていたら、恥ずかしいからやめるとめちやくちゃ怒られたっけな。

五時半からは掃除。毎日徹底的に綺麗にしているはずだが、それでも厨房は一日の激しい戦闘で惨憺たる状況さんたんになっている。しかしそれを看過するわけにいかない。この店を害虫・害獣の楽園にするわけにはいかないのだから。

先にフロアの清掃を終えたスカイが、夕飯を作っておくと言い置いて自宅部分に引き揚げていく。こちらでもあらかたの行程を終え、あとは床を塩素漂白剤で拭き上げて排水口に洗浄剤を入れるだけだ。それを済ませると、スカイのスクーターを借りて買い出しに出る。穀類や調味料や冷凍品や乾物などについては契約業者に登録して夜中に届けてもらうが、やはり生鮮品だけは自分の目で確かめて仕入りたい。

サラダのキャベツ……天候不順で値が上がったし質もあまり宜しくない。値上がり幅が小さい大根や玉葱を使うという作戦を有効かもしれない。小アジが安いな、鮮度も悪くない。小さいと内臓を取るのが面倒だが、それでもこれは揚げても良いし南蛮漬けにしてもいい。焼くのも炊くのもオールラウンドに活躍する。

毎日かなりの量を買うことになるので、スクーターの後ろにビザのデリバリーのような大きな箱を着けることを真申してみようか……。そんなことを思いながら、箱に入りきらない食料は足下やハンドルになんとか固定して持って帰る。

「おかえりなさい、」ほんできてるよ」

「ありがとう、ただだよ」

どうやら今日は筑前炊きに挑戦したらしい。スカイ本人は『フロの腕に較べたら私の料理な

んで』と卑下するが、なかなかどうして、しっかりと味が浸みているし、アマチュアでこれだけのものを作れば上等だしプロとしてでも十分に及第点だ。……多少味がどいのだが、一日働いた身にはかえってこのくらいの濃さありがたい。

「ちそうさま。旨かったよ」

「本当に？」

「当然だろ。こんなメシを食わせてもらえるなんて、もう今日が命日でも悔いはないぞ」

「今日が命日なのはセイちゃんが許さないのでダメです」

「そうは言うが、平均寿命から考えると俺ももう十五年かそこらだよ？　あくまで平均だから、

そこまで生きられるという最低保証でもないし」

「それでもダメです。私を見送るまで生きてください。でないと赦しませんからね」

「難しいオーダーだな。女の方が平均寿命が長い上に、そもそもスカイは俺より十一も歳が下だからな」

「それでも、なんにも要らないけど、今際には私の手を握って、涙を零してください」

「……そしたら『あなたのおかげで良い人生でした』って言ってくれるのか？」

「必ず、必ず言いますから……」

「……よしんば見送ったとして、この世界と俺を無理やりにも繋ぎ止めてくれたスカイがいなくなったら、俺もすぐに後を追うぞ？」

「それはダメです。自分で命を絶ったら、あなたが私のいるところに来ることができないじゃないですか。あなたが来るまでずっと私は待っていますから、向こうでも私と添い遂げるって、約束してください」

「他人が本当に困るような我儘は、昔からあまり言わなかったスカイなのにな。こんなに俺を困らせるような我儘を言ってくるようになるとはなあ……」

「私の適齢期を棒に振らせた責任を、この程度のことで赦してあげてるんです。この条件を呑めないなんて言わせませんよ？」

「困ったな。こればかりは天に任せるしかないから約束はできかねるが努力はする。……それからもうひとつ」

「なんですか？」

「愛してる、スカイ。どこまで輪廻の輪が続こうが、俺にはお前しかない」

「ミッ！」

フリーズしたスカイの後ろから、給湯設備から浴槽に湯が張れた旨の通知が来る。

「風呂、湧いたな。入るぞスカイ、一緒に」

「えっ、あっ……はい……」

お互いに全盛期なんてものはとうに過ぎた身体だが、それでもそれを露わにするのは気恥ずかしいし、相手を見るのもそうだ。でもその相手の裸体がたまらなく眩しいことも確かで……そのせいで、いつも湯あたり寸前になってしまう。

風呂を出ると、あとはもう寝るだけだ。

一緒にベッドに潜り込み、顔を見合わせながらまたいろいろな話をする。コロコロと笑いながら話すスカイといつまでもこうしていたい、もうこの頃には意識が限界に達している。朦朧とする意識に合わせて、スカイが少しずつ口数を減らしてくれる。最後にとても優しい顔になって、そつとスカイが肩まで毛布をかぶせてくれて……いつもそこで意識が消える。

これが人生の運の総決算なんだろうな。

総決算なのだから、これもそう長い話ではないはずだ。

だが願わくば、たとえ一秒でも、この夢の時間が続くことを。

【補足的な何かのコーナー】

もう、書いている人が云う科臼ではないのかもしれないけど。

『あんたら二人で未永く爆発すれば良いよ……』

って感じ。お腹いっぱいです。

引退後も変幻自在なトリックスターズ

「おじいちゃん、なにを読んでいるの？」

眉間に皺を寄せながら手紙を読んでいた彼は、ふと我に返って声がした後ろを振り返った。クレヨンで描かれた似顔絵らしき紙を誇らしげに持って来た孫が、不安そうに見上げている。

「おじいちゃんの古いお友達からのお手紙だよ。……その絵はもしかして、私とおばあちゃんを描いてくれたのか？」

「うん！ 二人にあげる！」

「おお、そうかそうか。ありがとうなあ」

頭を撫でてやれば破顔して、嬉しそうに廊下へと駆けていく孫娘を見て、改めて手紙を見返して溜息をついた。

「俺らも歳を取ったなあ……。おじいちゃんおばあちゃん、か」

「なにを今更」

幾ばくかの苦勞を顔に刻んだ氣品のあるウマ娘が、ボーンチャイナの白磁器のコーヒーを差し出す。

「それより、その手紙、なにが書いてあったのかしら？」

「ん……読んでみるか？」

無造作に紙を要に差し出し、コーヒーを啜る。

「……そう。定年退職……」

「もう俺らもそういう歳なんだなって、少し感傷的になった」

「あの人、ずっとトレーナー寮暮らしだったのね」

「独身だからな。……元々、メンツだの虚栄だのというものとは縁遠いやつだったから、そんなものために、わざわざ学外に家やマンションを借りたり買ったりという必要性を微塵も感じていなかったんだろう」

「それにしても……四十年……」

「……俺らの価値観を押しつけるのは良いことではないが、それにしても……だな」

「あの人だけの四十年なら私もなにも言う気はないけれど……」

「それも含めて、それが二人の決断だった以上、それに意見をすることはできないな……」

「はい、もしもし？」

『ご無沙汰して申し訳ない。俺だ』

「なんだ急に、電話なんか」

「いや……うん、前みたいに手紙にしても良かったのかもしれないが、なるべく早く知らせた方がいい気がして電話をさせてもらった。……いま、少し話せるかな？」

「はは……俺らもう老後の世界だ、時間だけは余ってる」

『そうか……そうだな』

「で、その知らせっていうのはなんだ？」

『えーっと……その……なんだ、うん……』

「幽切れが悪いな」

『あいや、申し訳ない……えっと……』

「時間だけは余っているとは言ったが、無駄にはしたくないんだぞ？」

『そうか……そうだな。悪い、五秒だけ深呼吸の時間をくれ』

「……五秒経ったぞ、時間だ」

『じゃあ単刀直入に言う。俺……結婚するんだ』

「……は？」

『だから、結婚すると言った』

「申し訳ない。その単語をお前から聞くのは、あまりにも想定外が過ぎたんだ。いや、驚いた」
『そうだな、俺自身、こんな単語を吐くとは少し前まで夢にも思っていなかったくらいだからな』

「だが、相手は誰だ？ これまた申し訳ないが、マッチングアプリかなんかで老年独身男を引っかけるヘンな女に騙されている、なんて可能性も考えられるだけに、まだ手放して喜べん」
『ヘンな女なんかじゃない！ ……ああいや、ちょっとヘンな女かもしれない。いや、かなりヘンな女かも……』

「……誰なんだ？」

『お前も多少知っていると思う。なんなら、お前の奥さんはもっと彼女を知っていると思う』
「……というところ？」

『そうだな、こんなところでクイズをしても話が始まらんから答を言う。その相手というのは……セイウンスカイだ』

「……は？」

『だから、セイウンスカイ』

「……え？」

『いい加減にしろこれが最後だもう言わんぞー その耳かっぽじってよく聞きやがれー セイウンスカイだっつってんだろー』

「いや待て待て待て、お前もしかして気でも触れたか？ 大体、いつお前があの子と再接触したんだ？」

『……えっと、もしもし？ 電話代わりました。キングの元トレーナーさんにして現旦那さん？ 私、その渦中のセイウンスカイです』

「……は？」

『ついさっきなんですけど……私、この人に求婚されました。ホテルグランドゴイスの最上階ラウンジで。いや、再会したときにプロポーズはされていたからもういいって言ったんですけど、こういう儀礼はケジメなんだからちゃんとしなきゃいけないって、もうあの子が頑として譲らなくて……』

「え？ ……は？」

『それで……改めて、正式に、お話をお受けしました』

「……」

『私達、結婚します』

「……」

『それで、正式に婚姻届を出して入籍する前に、お互いに親しくして貰っていた同期とかには、やっぱり少しでも早く伝えたくて……』

「……」

『もしもし？ もしもーし？』

【おまけのサムシング】

『もしもし？ グラスちゃん？』

「セイちゃん？ あなたの声を聞くのも随分と久しいですね。そしてあなたから電話を掛けてくるなんて珍しい。明日は雨でも降るのでしょうか？」

『いやー……不義理ばかりで本当に申し訳ない。でも私も久しぶりにグラスちゃんの声を聞いて、なんか嬉しいよ』

「あらあら？ 今日のセイちゃんはやけに素直ですね」

『実はね……グラスちゃんにどうしても伝えたいことがあって、それで電話したんだ』

「伝えたいこと？ なんてしょうか？ 少なくともこしばらく、あなたから実害を受けるようなことはありませんでしたか……？」

『私さ……結婚しようと思う』

「……えっ？」

『結婚しようと思ってる』

「……ちょっと、誰と？ えっ、どういうことでしょうか？ セイちゃん？」

『ホントだよ。セイウンスカイさん五十四歳、ついに私にも、心の隙間を埋めてくれる男性が現れました』

『それはダメです。今のあなたにつけ込んでくる男なんて、碌なものではありませんから！』

『そう……かなあ？』

『そうですー あなたはずっと燐りんり続けて、苦しんで、でもやつと今のお店を開いて十二年続いて、ようやく少しくらいは人並みの生活が戻ってきたところなんです。あなたの長年の苦しみがどれほどのものだったか、それを誰よりも知っているのはセイちゃん、あなただけでしょ？ 今あなたに言い寄ってきている男は、ようやくあなたが手にすることができるようになってきた、そのささやかな幸せすら根こそぎ奪っていかうとしている結婚詐欺師以外の何者でもありませんよー 目を覚まさない！』

『グラスちゃんひどい。私が、やつと見つけた、幸せの青い鳥を、そんなに……』

『セイちゃん、今どちらですか？ 今からすぐ参りますから！ 早まった決断をしないで！』

『ホテルグランドゴイスのスイートルーム……一六〇一号室……』

『その男と一緒なのですね？ ちよつと電話に出さない！』

『もしもし、電話替りました。……はは、酷い言われようだったね。でもまあ碌な男じゃな

いのは確かだと思うよ』

「……えっ？ その声、あなたはまさか……？」

『そのまさかかどうかはわからないけれど、彼女の現役時代に彼女の横にいた男です』

「えっ……ええっ？」

『……リクエストにお応えして電話に出したよ。もー、昔から言ってるじゃん。私はトレーナーさん以外の人と結婚しないってー』

「……実はですね、最近、新しい得物を手に入れてまして、少し試してみたいと思っていたところなので。ちょうど良い機会ですので、ご婚約のお祝いとして、稚拙ですが長刀の演武をお見せしますわね……」(ふっふ)

「……だからやめとけって言っただろう？ スカイ、現役のときに口癖のように言ってたじゃないか。『グラスちゃんを怒らせてはいけない』ってさあ」

「私、……調子に乗りすぎたかな……？」

「なんとか俺が説得するが、いざとなったら俺が斬られてる間に逃げろ」

復讐と幸せとおいしいごはん

けたたましいベルが鳴る。

このご時世にどこで見つけてきたのかとよく質問される黒電話。それが知らせを受けよと喚んでいる。

『はいはい、こちら喫茶『サンセット・ムーンライズ』です』

客が帰ったテーブルから下げてきた茶器を左手にしたまま、右手で受話器を取る。

『今から次の急行に乗るんで到着が五時半を少し過ぎるんですけど、行ってもいいですか？』

『あーごめんなさい、うち五時半ラストオーダーの五時半閉店なんで』

『それはわかっています。でも、行きたいんです』

『と言われまして、うちも年輩二人だけでやってる店なので、五時半まで店を回すだけで手

一杯で……』

『覚えてらっしゃいますか？ 私、ラピッドラビットです』

「えーっと……？」

『もう一年近く前でしようか、お昼の遅い時間に友達とお店にお邪魔して、そこで私の友達がちょっと余計なことを言っちゃったおかげで一悶着があった……』

「……あ、あー！ はいはいはい！ ちょっと大柄で優しい顔したあのラビちゃん？」

『優しい顔かどうかはわかりませんが、たぶんそのラビです』

『それならそれと言わなきゃ。危うくお断りするところだったよ。いまから急行って言ったよね？ ということは手前から普通に乗り換えてその普通が……二十九分着？ おいでおいで！ 歓迎するから！』

『連れがいて、都合三名なんですけど、いいですか？』

『三名だろうが八名だろうが十八名だろうがおいで！ まあうちは定員十八だからそれを超えろと入れないけど』

『良かったあ！ それじゃ伺いますね！』

受話器を置くと、調理場で折りたたみ椅子に座りながらウトウトと船を漕いでいた夫の元に出向き、その肩を軽く叩いた。

「ああごめん。疲れてたのかな、少し寝てた……もう閉店か？」

「いんにゃ。今日は閉店時間が延びます」

「うん？」

「あなたのかつての教え子のラビちゃんから電話を買って。二十九分着の普通で来るって。ラビちゃん含めて三名」

「そうか。……あすの食材は無理して買いに行かなくても在庫だけでなんとかなるし、それなら彼女たちを迎え撃つか」

「時間的にはご飯時だけど、お夕飯で出せる物、なにかあるかな……？」

「OK、もうそこまで時間の余裕もないし、簡単な物だけど今から作ろう。俺らの分もどうせ作るんだ、手間は変わらない」

「うん、お願いね、あなた」

「イエスマム、任された」

「スカイさん、ご無沙汰してますー」

扉のカウベルが鳴り、大きな影が入ってくる。

「ラビちゃん、おひさしぶりー」

「トレーナーさんも壮健そうで、なによりです！」

調理場から顔だけ出した影にぺこりとお辞儀をして、ラビッドラビットが言う。

「三人って聞いたけど、一人？」

「あ、その、本当にお邪魔じゃないか最終確認で……迷惑そうな雰囲気なら帰るって話に」

「帰さないよ？ 近くにいるなら連れておいで？ 簡単な物だけど、お夕食も三人分プラス私

達の五人分、あの人が作ってくれてるんだから」

「わかりました。ちょっとメッセージ打ちます」

やがて影がふたつ増え、カウペルを鳴らす。

「どうも……」

「トリちゃん！ 元気にしてた？」

抱きつかんばかりのセイウンスカイを制しながら、トリと呼ばれた小柄なウマ娘が言う。

「約束通り、あんたをコテンパンにしに来た」

「……お初にお目にかかります。トリが……オートリヘブバーンがお世話になったそうで。私

は……」

「私の婚約者や」

「じつ？」

驚いた瞳になって、その影をまじまじと見る。背文はすらりと高く整っている。それでいて両眼にたたえた光が穏やかで、話をするまでもなく悪い男ではないことを理解する。

「南欧料理のレストランしてはるオーナーシェフさん」

「ほへえ……」

「閉店時間過ぎにすみません。どうしても来て欲しいとトリから言われまして、店の方は今日のディナーの予約をかねてから断って時間を作ってお伺いした次第です」

「いやいやとんでもない。うちみたいな店にわざわざ足を……」

「スカイ？ 料理を持って行くから皆さんに座って頂いて？」

調理場から声が飛ぶ。

「だそうです。皆さんあちらのテーブルへー」

「うちはちやちな喫茶店ですから、客人への夕食といってもしよせんこの程度のおもてなししかできませんで、誠に心苦しい限りですが」

いつも通りのカマーエプロン姿で、器用に右手に四枚と左手に一枚のプレートを載せた厨房

担当が給仕をする。いつものモーニングやランチで使っている、既に仕切りの凹凸が入ったメラニン樹脂のプレート。載っている料理にしても、メインがスパゲティカルボナーラ、鶏の切身をポアレに焼いたものとサラダ。

「ちょっとお……もう少しこましなものは作れなかったんです？」

スープがあるから手伝ってくれと言われて夫と一緒に調理場に引っ込んだスカイが小声で囁く。

「あの顔、テレビかなにかで見たことがある顔だよ。記憶が確かなら、トリが連れてきたのは返子だか葉山だか鎌倉だか、とにかくあの辺で一つ星を運営している人だ。……トリもまたとんでもないのを連れてきたなと驚きはしたが、だからといって卑下する必要なんかないさ」

「でも……」

「確かにな。使った食材はいつも通りの、コストと相談しての妥協の食材かもしれない。……だが、だからといって手を抜いた覚えは一度たりとてない。相手が誰であつても、だが。……いま、俺が手元から切れるカードで立案できて実行できる最良の作戦があれだ。スカイは店の大将らしく堂々と構えてる、一つ星がなんぼのもんじゃいって気構えでな。……心配するな。これで勝てなきゃ俺の完全な力不足だ、仕様がな。そんなとき俺が土下座でも首縊りでも切

腹でも、スカイが望むなら、どんな罰でも受けてやる」

自分の右腕をベシッと自身で叩いてから、自信満々に頷く顔を見て、スカイの不安は霧消した。

「じゃあ、ダメだったときは、鼻でスパゲティ食べてもらいますからね！」

「ん、心得た」

表情が変わった。明らかに。

「あの……失礼ですが、この鶏は……？」

「はは……気づきましたか申し訳ない。うちは一食あたり数百円の商いでやっているもんで、から、駅向こうの業務用食材を扱う店で買った、キロ単位でいくらのブラジル産冷凍ですよ」

「いや……しかし、これは……」

「ちょうど鶏皮の冷凍ストックが余り気味だったもので、アロゼの材料には間に合いました。しっかりと脱脂してカリカリにした皮は、軽くスパイスでも振ってやれば、庶民的で申し訳ないですがそれこそ晩酌の肴とか、子どものおやつくらいの仕事ができますからね」

「このカルボナーラのソースも……？」

「そこらのスーパーにある牛乳とチーズと卵とベーコンを使っただけです。……ああ、でも濃厚を出すためにチューブの無糖練乳を少し」

「麺もこれ、絶妙ですが……」

「乾麺ではなく生麺です。とはいえ冷凍ストックですが」

「それを……我々が突然来ると知ってから、しかもラビさん以外の誰が来るか知らないままに、あの短い時間でお考えになった上で、実際に……？」

「ははは……せめて前日にでもお越しになることを聞けていれば、食材にしろ献立にしろもう少しいいものをお出してきたんですが。あの条件下で用意できた最上級ディナーがこれしきで、面目がない」

「トリ……お前、現役中は、この方の料理を食いたいと思ったらいつでも食わせてもらえてた……のか？」

「……え、まあ、うん。ていうかトレーナーは余計な世話焼きたがるタイプやったから、おもった調整が入るレース前とかは昼夕の一日二食は？ ……なあラビ」

「うん、出走が続くときなんかは三ヶ月くらい毎日かな？」

「マジか……マジか。俺この人にもっと早く会えていたら、あるいは今頃星二つを狙えるくら

いのところにいたかもしれない……」

「うちみたいな店の料理で、何かヒントになれば幸いです」

「ヒントどころか……」

「それはそれとして。私は親ではないのでこんなお願いをするのは不躰かと思いますが、この子を……トリをどうかよろしくお願いします」

「あああそんな！　どうかそのお顔を上げてください！」

「ぢよいぢよいちよいトレーナー！　うちの親でもやらなかったようなことせんでええから！」

「あなたって……凄いヒトだったんですね……」

「よせやい。……俺だってこれでも、この『サンセット・ムーンライズ』の店主に拾ってもらってこの厨房の一切を任されているシェフだからな。ああいう店の一流シェフと比較して、スキルだ頭だはともかく、少なくともメンタルでだけは絶対に負ける訳にゃいかんのよ」

「ふふ、最初はトリちゃんが凄いヒトを連れてきたとビビっちゃいました。でもやっぱり、誰が相手に出てこようとも、私にとってはあなたに勝るヒトなんていないんだなって再認識です」
「イエスマム、そのお言葉、この身に余る光栄で勿体のうございます」

「……うむ、こたびはその方、よく働いた。この功績決して軽からず。よって勲章を授与する」

「勲章？」

「……まあ、ここにはこの程度の勲章しかないけどな？ んっ……」

「……。はは、スカイから能動的に唇を獲りに来るとはな。でも確かにこれは俺にとって最高級の勲章だ」

「今夜のセイちゃんはエクセレントブリリアントマーベラススペシャルスーパーハイパーに素敵なあなたにうんとこさ甘えたいので、寝かしませんかね？」

「そんなことすると、明日の朝、店が開けられないじゃないか」

「それはノープロBLEM。既に店の表には『本日体調不良のため誠に勝手ながら臨時休業致します』って紙を貼ってるから」

「いつの間に」

「寝不足だって体調不良でしょ？」

「……そのかわり、明後日は覚悟しろよ？ 息をつく暇もないくらい働くし働かせるぞ？」

「Eロンドンデー！」

「なんだかまた今回も、タダでトレーナーさんのごはん、ご馳走になっちゃったね」

地下鉄の車両の隅の席。大きなウマ娘が先刻の味を思い出すように隣の小柄に話しかける。

「……実はな、ウソやってん」

「なにが？」

「彼の前で言った、職場に忘れ物したから取ってこなあかんからラビと同じ電車に乗る、いうんが」

「……なんでそんなことを？」

「そうせな、ラビと一緒に時間が作られへんかって思って」

「……？」

「あの人なあ、めっちゃええ人やねん」

「そうだね、ごちそうさま」

「いや、これ惚気やないから、ちょっと聞いてえな」

大柄が肩を竦めて見せたのを、小柄がその腕を掴んで言う。

「ただ、ひとつだけ許されへんことがあんねん」

ただならぬ状況を察し、大柄が小柄の顔を覗き込む。

「あの人、親もなんか結構有名な飲食店やってはるみたいで、それこそ物心ついた頃から包丁持ってフライパン振ってはったらしいんよ。料理界でいうエリートみたいなもんなんやるか」
ちゃんと聞いているよと言う意思表示を大柄から送られて、小柄が続ける。

「せやから、あの歳で、ああすが一つ星のオーナーシェフやなっている腕してはる。それはラビも連れてって食べてもろたし、わかるやる？」

「……そうだね、美味しかったね」

「せやけどなあ……」

電車が急なカーブにさしかかり、車輪とレールが擦れる甲高い音がトンネルに反響し、少しだけワインが入った頭にわんわんと響く。

「なんか、ちやうねんよ」

今度は駅に接近し、ブレーキが軋む。

「なにかが、違う？」

ホームに停車し扉が開く。これから郊外に向かう側のホームは人で溢れているが、都心に向かうこちら側は閑散としていて、車内にも立っているのは数人程度で。

「ええ食材を金に糸目つけんと惜しみなしに使うて、それを世間様が美味しいって評価するん

は………こんな言うのも失礼やけど、当然やん？」

「……当然かどうかまでは断言できないけど、その確率は高くなると思うよ」

「ラビも知ってるやる？ 私が乳製品………というか、乳脂肪が苦手なん。生クリームとかチーズとか」

「現役の時、トリちゃんの誕生日パーティーをしようとしたら、ケーキ買ってきたらあかんで、買うんやったら和菓子にしてやって言われたね」

「でもそれもお構いなしやねんね。私が苦手なもんでも、これはこだわり抜いた食材で作った料理なんだから美味く食えるんだ！ って出してくるし、それがやっぱり受けつけんで残したら怒る。……作ってくれたのん残すとか失礼やっていうのは確かにそうやと思うで。でも、それ苦手やっていう人にそんな知らんがなって出してきいて、食べんかったら怒るとか、ちよっと自分勝手が過ぎへん……？」

「……あー、うん、そんなところあるね」

「今日、トレーナー、カルボナーラ作ってくれはったやん？」

「美味しかったね」

「せやな、美味しかった。……けど考えてみ？ カルボナーラやで？ 卵はともかく、牛乳に

チーズやん。乳脂肪の寄せ集めやん？ 普通に考えたら、私が好きな系統と真逆の位置における料理やん？」

「あれ……？ トリちゃん普通にあれ完食したよね？ 無理して食べたとか……？」

「……あれな、ホソマに微妙に、私のんがソースの色薄かったん、気づいた？」

「……え？」

「ラビがあのお店に電話して三人で行くって伝えたとき、たぶんトレーナーはこう考えはったはずや。『ラビを含めて三人。親友のトリはおそらくその一行の中にいる。もう一人は誰かわからないが、来客三人のうち少なくとも一人は乳脂肪が好きではない確率が極めて高い。……なら、五人分作るうちの、まだ明確ではない来客二人分はバタ臭さ抑えて作って、もし予想が外れてたら、ハズレがひとつなら薄いのは自分が、ふたつなら申し訳ないが奥さんにも回して来客三人には美味しいの食べてもらおうか』って。色薄かったんは、チーズの量を抑えてエバミルク入れなんだソースも作ってたんやないかって思うし、それでもあの程度の色の違いで抑えてみんなの目をこまかせたんは、私らのソースには卵黄多めに入れてるからやわ。どないしてもチーズの黄色を乳脂肪以外で補おうとしたら、レシピから考えたら卵黄しかあらへんからね」

てへんやるなあ。……バカにするわけやないけど、あの奥さん、自分がどれだけ凄いゆりかごの中に包まれてるか、少なくとも私より理解できてへんと思うで？」

「そんなことが……なにもわからなかった……」

「トレーナーは、さすがに純粋な料理全体のスキルは、まああの人に勝たれへんやるって思うんよ。ようテレビとかでやってる料理対決番組みたいな、おんなじ材料と制限時間でおんなじ料理を作れとか、つまりまったくおんなじ土俵で相撲したら、開始三秒であの人に上手で投げられて終わりやるね」

「……」

「でもな、あの人が勝てるんは、あくまでおんなじ条件でおんなじもん作れっていう条件戦だけや。去年食べさせてもろたおんなじ見た目の大盛りと小盛りやのに摂取カロリーも蛋白質もほぼほぼ一緒のランチ作るとかかてそうやけど、そういう気遣いとか、食べる人の好みに配慮して最大限合わせながら絶対に譲られへんところのラインを護るとか、そこまで全部ひくくめて勝負したら、逆に今のあの人は……トレーナーが立ってる土俵にたどり着くことすら無理なんやるね。トレーナーの真価は安い食材を高級食材と同レベルに引っ張り上げる力とか、そんなお遊戯みたいな程度のもんやないんよ。あの人そんなことを感服しとったけど、お前の目

はそんなに曇つとんのかい、それでよう一つ星シェフでございってデカイ顔できるなあってツッコミかけたわ。……トレーナー、世間の大多数がその采配をどう評価するかやのうて、自分が向き合ってる人がどれだけ楽しんでくれるか喜んでくれるか、そこを見て、それが叶うようにめちやくちや考えてお膳立てしてくれてはる。今夜も、ホンマに来るかどうかも確定してへん私のために、それでも私が美味しいと思って食べられるように、でも一人だけ違うメニューで恥かかへんようにつけてくれたはった。大皿で取り分けるスタイルにせんと、取ってあんな安っぽいプレートで『各自これだけな！』って形にして持って来たんも、私のフォローのためやるなあ。外向けには『お客さんに食器ひとつマシなもん出さへん非常識なオッサン』って自分が恥かくようにすることで、私への気遣いとかフォローとか、あと私がかくべきやった恥の痕跡まで消してくれてるんや。……これ別に今回の料理の話だけやないよ？ 昔も、私らのトレーニングに関してとかもみんなそうやったやん。私を筆頭にあんなにアク強くて出来の悪いメンバーしかおらん上に、あんなに素寒貧な予算しかない台所事情で遠征のスケジュールとか費用考えて効率よく組み立てて、それでもチーム全員、少なくとも三年間で一回は重賞の優勝レイかぶらせてもるて。いちばん出来の悪かった私が一回、ラビなんかは五回やったわなあ。ようやってくれたはったわ。はじめてトレーナーとして指導を担当した奥さんが早月と菊を獲れ

たんも、そら奥さんの素質も無視はできんけど、あのトレーナーやかからやで。……ホンマにすごいなあトレーナー。ガールハントステークスなんてG1が仮にあったんやったら、私の知ってる限りでも、トレーナーは少なくとも三勝してはるもん」

「……え？ 三勝？」

「奥さんやろ、私やろ、……そしてアンタや」

「えっ？」

「……まさかアンタ、気づかれてへんとも思うとったん？ ラビ、アンタかてトレーナーが好きで好きでたまらんかったんやろ？」

「……はあ……気づかれてたか、じゃあ私だけ隠そうとしてもどうにもならないね。……そうだよ。大好き」

「ありがとおな。現役のとき、私が迂闊に先にトレーナーが好きやなんてアンタに吐露してもうたから、それでアンタはそれを私に言おうとせんかったんやろ？ ……せやけどな、アンタがトレーナーを見る目に尊敬だけやない感情が入ってたん、私にすら見抜かれてんねんで？ あのトレーナーが気づいてないはず、ないねんで？」

「うわー……恥ずかしい。もうトレーナーさんの顔見られない……」

「今までずっと知られたまま見てきたんやから、変なところで恥ずかしがらんでええと思うで」

「……そうかな……？」

「トレーナーって、別にめっちゃ背の高いでもないし、めっちゃ顔がええってわけでもないし、めっちゃしっかりしてはるってわけでもないやん」

「んー……。そうだねえ確かに……。物凄く抜けてて天然なところもあったし、かつこ悪いところも結構見たよね」

「でも少なくとも三勝もしたんは、そういうところもあって思っわ。……うちのガツコも趣味悪いで。多感期の少女にあんなアヘン与えて溺れんかっていうんがそもそ無理な相談やわ。私ら、トレーナーがもう五十過ぎのオッサンになってるときですらそうなんやもん、二十代の浣刺イケメン青年やったあのトレーナーを、しかも専属でぶち込まれた奥さんなんか、そらもうひとたまりもないわ」

「ははっ、とんだドンキホーテだね……」

「食事ご馳走になった後な、別れの挨拶したとき、私だけニ言三言、トレーナーと喋ってたやん？」

「……うん」

「世の中こんなに広くても、百パーセント自分の好みの異性なんかいないんだよ。俺はそりゃスカイを愛してるし、スカイはかなり自分の理想には近いけど、それでもまあまあ、いいところ理想に合致するのは七割半ってことで、あとの二割半はむしろこんなスカイ知りたくなかったってことがある。その二割半に目を瞑るか、それでも我慢ができなきゃうまく育てて改善するかだ。七割半も愛しているのに、たかだが二割半のことで対立して関係壊すなんてナンセンスだ。そしてたぶん今夜、トリの目には彼のそういう面が幾ばくか新しく見えたと思うが、それをどうするかはトリ、お前次第だぞ……って言われたんよ」

「……住んでる世界が違うよね、トレーナーさんは」

「それ。住んでる世界が違いすぎるわ。よっぽどハリウッドあたりの売れっ子の一流イケメン俳優のほうが簡単に手の届く場所にいてるで。……そう考えた途端、私にとってあの人ってまあまあ理想の六割五分くらいのところにいてるし、あとの三割五分をうまいことやってこか、って思えた。……婚約からこっち、まだふわふわとした概念しかなかった結婚やけど、今の私の中では、もう近いうちに具体的に話詰めて、年内に入籍まで持つて行こうと思うてるんよ。披露宴やるかどうかは別として」

「そっか、おめでとっ」

「おおきに。……次はフビの番やで？」

「といわれてもお……」

「作戦会議しよか。どこでやるか？ オールナイトの居酒屋くらいあるやろ？ それともアンタの今住んでるアパートでもええで？」

「私のアパートって、この地下鉄の終点から更に乗り換えだよ？」

「ええやん。この際アンタにはどこまでも付き合おうで！ だいたいアンタ、自分がどんなええ女か理解してへんやろ？ 私が男やったら、今頃アンタは私の嫁か、そうでなければ私のストーカー被害者やで？」

「冗談に聞かえないんですけど！」

明日もまた青空の空騒りなし

弱気は弱気に執着するという学び

五時半のアラームが鳴る。シーツの裾を掴まんで夢の世界にいたセイウンスカイは、もそもそと時計までベッドの上を這いずって、その騒音を止めた。

「もう朝かあ……」

目を擦って、枕頭台の魔法瓶の冷水を飲んで、ふう、と大きな息を吐く。遮光カーテンの隙間から朝の光がちらつくのが見えて、窓際に立って光を浴びる。

「今日も、いい天気になりそう」

階下の台所からは卵が焼ける甘い匂いが立ちのぼっている。今朝もちゃんと甘い王子焼きを作ってくれているらしい。

「あの人、本当は辛い王子焼きが好きなのに、私なんかに合わせてまあ……」

毎朝の心遣いに胸の中がキュッと締まる感覚を抱きながら、大きく伸びをして、口の端で悪巧みの笑みを浮かべる。

「さて、着替えますかねー」

「おはよう、よく眠れた？」

鍋に味噌を溶きながら声だけを飛ばしてくる夫の姿を認める。

「おはようございます『トレーナー』さん！」

「んっ……？」

小さくビクッと肩が動いた。これは面白い反応だ。

「どうしたんですか『トレーナー』さん？」

「え……スカイ？」

「にやはは、案外着られるものなんですな。セイちゃんビクリですよ」

「……いや、俺がビクリなんだけど。よくそんなもんなだ持ってたな……」

「いやー……あんまりマジマジと見つめないでくださいよ『トレーナー』さん。セイちゃんち
よっと恥ずかしいですよ？」

「スカイ……」

「ちょ、ちょーっと目が怖いんですけどお？」

「ごめんスカイ、ちよっとその格好見て、俺もう自分を制御できない」

「ま……まさかあなたって、女子中高生大好きロリコンさん……だったんです……か？」

壁際に追い詰められながら、かつて着ていたセーラー服を震わせながら、声が震える。つい先ほど水を飲んだはずなのに、喉がカラカラになっていた。

「……スカイが悪いんだぞ」

「いやいや掛かりすぎでしょあなたー 目を覚ましてくださいよ！ 制服着ててももう私五十も半ばですよ？ ひあ……」

「ごめんなスカイ。俺が素直になってあの頃からこうしていれば、お互いにもっと違う人生だったんだろうにな。好きだスカイ、愛してる、離したくない」

「ちよっ……もう、そのくらいで……。ダメだって、抱き締めながら耳元でそんな囁きしないで、ふああっ……」

「……ごめん」

「……言いたいことはそれだけですか？」

「あー……いや、もうなにを言おうが見苦しい言い訳にしかならんから、なにも言うことはない。ただとにかく……ごめん」

「いやー……。まさかあなたが女子中高生大好きオジサンだとは、さすがにこのセイちゃんでも幻滅ポイントですよ」

「……ひとつ発言して良いかな？」

「なんででしょうか」

「そこは反論したい」

「でも間違いない私の制服姿に掛かってたしやないですか」

「そこだ」

「どこですか？」

「制服着てれば誰でもいいってわけじゃない、ということだけは、反論したいと思うし理解されたい」

「じゃあ朝のあの醜態はなんなんですか」

「だからだな……『スカイの制服姿』だったから、ということをも、理解して欲しい」

「へえー……えっ？」

「単に制服姿の女子中高生なら誰でも良いってんなら、アフタヌーンティーの営業のときに、なんで俺が調理場なんかでボーツと映画なんか観てなきゃなんのかって話じゃないか。トレンチからここにお茶を飲みに来る現役中高生ウマ娘を、誰にはばかることもなく生視聴できるつてのに」

「……あ。……あぁー」

「たとえ五十過ぎだろうが『スカイの制服姿』だから……うん」

「……め、めちゃくちゃ私のこと好きすぎませんか？」

「だから、スカイが悪いんだよ」

「な、なんでそうなるんですか」

「定年退職の日に俺の前に出てくるから」

「……それ、言いがかりじゃないですか」

「それまでいなくてもなんとか耐えられていたスカイがさ……思い出のまま三途の向こうまで持って行くはずのスカイが出てきて、それでもなお諦めるなんて選択が出来るほどは、俺はス

トイックじゃないんだよ……」

「それはまあ、私だって同じですけど……」

「しかもそれが、大昔に喪ったはずの思い出を持って来たらどうなる？ それ見て平常心を保てるヤツなんて……いいとこカレンチャンの元トレーナーくらいだよ」

「……さりげなく『お兄ちゃん』をめちゃくちゃデイスってません？」

「とにかく。……あの格好、間違っても俺以外の前でするな。俺の前だけでやれ」

「うわー……独占欲すこいですね」

「あの日以降の俺のすべてを引き換えに、あの日以降のスカイのすべてを譲り受けたんだ。俺はスカイの所有物だけど、その論法でいえばスカイは俺の所有物だ。俺の所有物に俺が独占権を行使しても問題ないだろ。つまり、それくらい当然だろ？」

「……ふふっ……。昔、私のことを恋愛弱者だなんて散々揶揄ってましたけど、あなたも大概、とんでもない恋愛弱者じゃないですか」

「その弱いもん同士で身を寄せ合った似たもの夫婦だろうが。それに、弱いからこそ、ひとつの恋愛にいつまでも諦め悪く固執するんだよ」

「……そうですね。……でも私は、弱者で良かったかなって思ってますよ？」

「……奇遇だな。俺もだ」

「ホント、私達って似たもの夫婦なんですね」

「……だから」

「はい？」

「今後も末永くよろしくな、俺のスカイ」

「……いまかなりドキッしました。カンストしていたはずの好感度、限界値突破してまた上がりましたよ？」

面影なんか胸に抱かない

「ところでさ……こんな道具まで読ってもらった上でこんな疑問を持つのもどうかと思うんだけどね？」

「はい、なんででしょうあなた？」

私の横に並んで座り、水面に糸を垂らしていたあの人が唐突に首を傾げて質問を飛ばしてきた。

「そもそも、この川に魚はいるんだろうか？」

「どうなんでしょうねえ？ スマホもないし釣り情報誌もないし、私もここで何が釣れるかなんてさっぱりですよ？」

「さすがにスカイでも知らなかったか？」

「当たり前でしょう。こんなとこ、初めて来た場所なんですから」
「普通に考えれば、確かにここは何度も来る場所じゃないよな」

薄暗い水面にはテグスが二本。テグスといっても、これはとどのつまり、私の尻尾の毛を数本結び合わせてそれなりの長さにしたもの。釣針だって、私が現役の頃から愛用していた髪飾りのピンを流用したもの。当然ながら竿もその辺の松原に落ちていた枯枝。

「こんなところで油を売って釣りをする亡者なんて私遠くらしいし、魚がいないと思うから、魚がいるとすれば警戒心はないはずなんですけどねえ」

「ま、いいんじゃないかな。急ぐような旅でもないし」

「あなたはちょっと急ぎすぎたような気がしますけどねえ。なんであなたがここにいるんですか。確かに、たとえ一日でも良いから私より先に逝かないで、とは言いましたよ？ だからといって本当に暦日で一日後に追いかけてくるとか、セイちゃんだって怒るときは怒りますよ？」

「それは本当にごめん。スカイの三回忌、いや初盆、せめて四十九日まではと想っていたけど、スカイが眠った夜が明けて、かかりつけのドクターに死亡診断書を書いてもらうために往診を電話で依頼して、先生が来てくれるまでの間に自分までスカイと一緒に眠ることになるなんてさすがに想定外だった。……最後に背中に灼けるような激痛が走った気がしたが、その直後にはこっちにいたからな。もうどうしようもなかったなあ。式はどの程度の規模のものを開いて、誰にこのことを知らせなきゃいけないかとか、考えることが山とあって、悲しいか思ってる

余裕すらなかった」

「へえ……その割には、私が息を引き取ってから、私の身体に縋りついてたつぷり四時間男泣きしてましたよね？」

「……知ってたのか」

「第三者的な視点から、じーっくり見てました。もっとも、押搦^{おしなぐ}おつが肩を叩こうが、気付かれもしなかったですけどね」

「そうと知っていれば、もう少し泣くのを堪えたんだがなあ。いちばん見せたくない弱みを握られたな」

「あと、今更言うなって話ですけど、私、あなたに謝らなきゃならないことがあって。……正直、私、そこまであなたに愛されてるって知らなかった……ごめんなさい。そりゃあずっと指輪を温めていたくらいだし、まったく私に恋慕を抱いていなかったわけではないんですけど、それでも女の四十年を棒に振らせた贖罪の念の方が強くて、その責任を取るうとしただけなんだっていう思いがずっとあったんです。でもそれって私が目を瞑っちゃったらもうその仮面なんかなくなり捨てられるじゃないですか。なのにあなたはあんなに泣いてくれた。自惚れかもしれないけど、そのとき初めて、この人は本当に私を愛してくれていたんだなって気づい

て……。そうと知っていたら、もう少し私、素直にあなたに甘えることもできたかもしれないし、あなたにもっと胸襟を開いてぶつかれたと思うし……とてももったいないことをしちゃったんだなって」

「今になってでも気づいてくれたのなら、今からでもいいと思うよ？　一緒にもう一段高いところを上ろうか」

「怖いですねえ。こんなにあなたの存在に依存してしまう体質にされちゃって、もう私に安寧の自由は訪れることはないんですね？」

「欲しいか？　その安寧の自由とやらが」

「……いや、あなたが傍にいてくれる方が何倍も何十倍もいい」

「こつちの世界のシステムがどういうことになっているのか、まだ来たばかりでよくわからないけど、ここで水面に糸を垂らしている限りでは、裁かれて逝く世界が違ふなんてこともなく、どうやらまだしばらく一緒にいられるみたいだな」

「わかりませんよあ？　もしかしたら、死んだはずなのにまだ我輩の沙汰を受けに来ないとはどうなっているのか、みたいな感じで閻魔大王の手下が隊を組織して大捕物を仕掛けてくるかも」

「……そうすると、沙汰を受けることをいたすに違らせたとか何とかで、スカイも俺も地獄行きかな？」

「私はあなたと同じところに行けるなら、地獄上等です」

「……ま、なるようになるだろ。ケセラセラ」

「そういえばですね。……私、実は『死が二人を分かちまで』っていうあの表現、物凄く嫌いだっただけですね」

「あー。どんなに惹かれ合っているように、死んだらそれまでっていうニュアンスに読めるよな」
「だから、死んだのに横にあなたがいてくれるなんて。さっきは『怒るときは怒る』と言ったけど、心がふたつあって、嬉しいなと思ってる私もいます」

「そっか。……俺もこっちで労せずしてスカイを見つけられて、実は結構嬉しいと思ってる」
その返事の代わりに、あの人の肩に私は頭をこてんと載せた。

「どこまでも行こう、道はー苦しくともー」

「きみの一面影むーねに、風を受けてー行こうー」

「……できることなら、私は面影じゃないあなたとずっといたいです」

【おまけのサムシング】

この章における二人の死因は決まっていますが、セイちゃんは発症したら進行が速くて、かつ現在の医療ではなかなか手をつけられない病氣（脾臓がんのような）を想定しており、体調不良を自覚してからその日までの期間はとても短く、最後の思い出作りに旅行をするとかのようないことはほとんどできなかった、という想定です。そして苦痛緩和の治療は受けたものの、積極的な延命治療については完全に拒否したので、余計にその日は早かったという想定です。

トレーナーは大動脈解離を想定。こちらは発症箇所や生活習慣にも異なりますが、基本的には何の前兆もなくいきなり発症すること、発症することと致命傷になることがニアリーイコール（発症直後に高度救急医療に掛からないと基本的にアウト）の病氣なので、まさにセイちゃんの後を追うように眠ってしまいました。セイちゃん逝去の心理的ショックがとてつもなく大きなストレスとして過大な負荷がかかったのも影響しているかも。

往診依頼を受けた医師が行くと、呼鈴を鳴らしてもトレーナーが出てこず、しかし施設されていないので中に入ってみると、寝室でベッドに寝かされたセイちゃんと、その傍らに置かれ

たスツールからセイちゃんの上に折り重なるように斃れているトレーナーを発見した感じです。トレーナーのほうは身体にまだ温もりが残ってはいましたが完全に事切れており、そしてそもそも往診程度で持参している医療器具では大動脈解離をどうにかできるわけがないので、この医師は二人分の死亡診断書を書かざるを得なくなり、そして誰にもその連絡をすることができなかった上に戸籍をたどっても身寄り頼りがおらず、行政葬の上で無縁仏として処理されました。お互いに電話連絡などをすれば親しく話ができる同期はいますが、普段は年賀状の交換程度なので、翌年の始まりに「そういえばあそこから今年は届かなかったが、喪中の連絡もなかったな」という気づきからそのことが発覚しますが、それまでには半年以上の時間を要します。

そういう意味では寂しい最期でしたが、お互いに「いちばんいてほしい存在」が傍にいてくれたという意味では不幸ではなかったということ。

トレーナーさんは差しにくる

屋上には先客がいた。

スーツが汚れることもいとわずに、コンクリートの床に寝転がって、組んだ腕を枕にしてぼんやりと空を見上げていて。

避けていたのに、避けていたくせに、不意にトレーナーさんの姿を見ることができたのが嬉しくて、私はひよこひよここと近づいていった。

「おサボリですか、トレーナーさん？」

「サボリかなあ。……もっとも、仮に仕事したくて堪らなくなっても、あいにく俺の仕事は、俺一人でできる仕事じゃないからなあ」

「すみませんねえ、誰かさんのやる気が行方不明になっちゃったせいで」

トレーナーさんの横に座る。トレーナーさんが自分の横をポンポンと叩く。私はトレーナーさんの横にころんと横になる。

「いい天気だなあ」

「いい天気ですねえ」

「……なあ、セイウンスカイさんや」

「はい、お説教ですか？」

「いや、ちょっと質問したいことが、ふたつほど」

「いいでしょう、とりあえず聞きましよう。ただし答えるとは限りませんよ？」

「ひとつめ。……まだ、走るのはつまらないか？」

「やはりそういう系統の質問ですか？」

「最終確認だよ。もう尽未来際この質問はしないから安心してくれ」

「未来のことはわかりませんが、少なくとも今は、もう走りたくないかなあ」

「そうか、わかった。……そうかあ……」

「ふたつめは、なんですか？」

最初の質問は、決して前向きな期待を持ったものではなかったけれど、それでも私の回答に
一縷の望みが托されていたのか、トレーナーさんが感想を述べた声には張りがなくて、それが
胸にズキンと響いて、私は堪らずに次の質問を急かした。

「スカイはさ……西と北なら、どっちが好きかな？」

「……はい？」

質問の意図が掴めなかった。

「どういう意味ですか？」

「……この学校では、歓迎されない生徒の種類がふたつあると思う。そもそも走る才能がない生徒。それに輪をかけて歓迎されないのは、走る才能はあるのにそれを活かさない生徒だ」

「……結局はお説教ですか？ もうお腹いっぱいなんですけど……」

「まあ、とりあえず聞いてくれ。それを説教と取るか違うと取るかは、それから判断してくれ」

「……いいでしょう。続けてくださいな」

「歓迎されない生徒がここにはないという明確な校則があるわけではないが、それでも大きな顔をして校内を歩くことはできない。アグネス・キオンなんかは自分の研究に没頭した挙句、模擬レースに形式的にでも参加してればまだしも、それすら拒否をした結果、退学勧奨まで出されたくらいだ。……まあそこは万事に対して有能な『モルモット君』の登場で事なきを得たけどさ。……そして実際に今の時点でも、スカイは息が詰まりつつあるんじゃないかな。針の筵に座らされているだろう。……おそらくここ最近、親友であるキング・ヘイローや

グラスワンダーたちの視界に入ることすら避けながらのキャンパスライフだろ？」

「……そうかもしれないねえ。うひゃあトレーナーさんは怖い怖い。見てもないのに、まるで見てきたようなことを言うんだから」

「そしてそれは、生徒だけが負っていることじゃ、ないんだよね」

「え？」

「トレーナーもだ。なまじクラシックG1をふたつも獲らせた上で教えている娘がそういうことになっていけば、有名校ってやつでやつかみが上乗せされる分、尚更にトレーナーが食らう厄は、なかなか陰湿でな、これがオトナの世界の舞台裏かと思うとなかなか楽しいぞ？」

「へ、へえ……。それは大変ですねえ」

「形だけでもスカイがやる気を見せている、スランプに陥って懸命に暴揺いているというボーズだけでもしてくれていけば、情状酌量の余地があるから手加減するかってここまでキツくはないんだらうけど……。ああいや、スカイを責めるつもりじゃないことは理解してくれ、俺だってスカイが楽しいと思うことだけをやらせたいんだ、偉ぶって説教をするなんざご免なんだ。……でも、いわゆるオトナの汚い舞台裏に神経をすり減らすこの生活が、俺にとってもそれなりにキツイことは、ちょっとだけ吐かせてくれ。それも今はまだ、俺がトレーナーとして

へっばこなせいで有能なウマ娘を潰しているという体裁を保っているが、俺が外圧からの爆撃で完全に無力化したからと云って、それで攻撃は止まらない。今でも流れ弾が当たっているスカイが一身にその攻撃を全部食らうことになるだろう。本土爆撃の開始さ」

「……」

「で、包み隠さずに言うなら、もう俺は限界だと思ってる。攻撃者としての俺は、被弾している側が苦悶しているから攻撃してくるわけであって、受ける側がそれに何ら痛痒を感じないからと攻撃をやめないんだ。攻撃を食らうてのたうち回ってくれる対象に対象を変えただけだ。……まあ、俺がいつまでも、少なくともスカイが卒業するときまで受ける攻撃に痛がるフリをし続けられればいいんだが、今から持久戦に持ち込んでも、完全に心が壊れるのはいいとこ一ヶ月が限界かなあ。……そもそも、俺には他人様に物事を教えるということ自体に適性がなかったんだろうな。確かに今になって考えるまでもなく、師というタマじゃねえよな俺。もっと早くに気づくべきだったんだよ。……だからこんなもんを書いたし、もう玉砕するからこれ以上守ってやれないということは早晩伝えなきゃならないなと思ってた。だから、今日ここでスカイに会えたのは本当に良かったよ」

胸ポケットから無造作に取り出された、素っ気ない茶封筒。

「……私からも一応確認なんですけど、それ……」

「退職届」

「なんてものを書いてるんですかー」

ひったくろうとした私の腕は読まれていたのか難なく躲かれて、虚空を切った。

「スカイが自分の去就のことを自分一人で決めたように、俺も自分の去就くらい自分一人で決めるよ」

「自分の将来をネタに、私を脅すんですか？」

「脅し？　なんでそんなことを？　……さっきも言ったように、俺は師というタマになるべきじゃなかったということを現実から教わったままでさ。スカイがこれで立ち直るかどうかなんて打算だけで、なんでこんなに思い悩まなきゃならない？　……で、話を戻すけど、質問の答えはどうだい？」

「……西と北でしたっけ。東と南はないんですか？」

「ないな」

「即答しましたね。どうしてか理由を訊きたくなりました」

「日本地図で東京の位置を見てみな？　そこがいわば、この国の東と南の最果てじゃないか。

俺はあいにく外国語は不得手なんだ。となると東や南に逃げる場所はない。……まあ南は小笠原の父島までは行けるだろうが、そしてあそこは確かに遠いが、もしそこに追っ手が来たらもう逃げ場がない。逃げる場所としてはいささか不都合だ」

「はい？ えっと、何を言っているんです？ あまり健康的ではないことを言っているというのだけは伝わるんですが……」

「この紙切れを出せば、そりゃ書類上はトレセン関係者じゃなくなるさ。でもこの近くにいる限り、実質的には誰もそう見てくれない。なら『セイウンスカイの元トレーナー』という肩書きを隠せるような、そんな遠いところに逃げるしかないなって。だから西か、北か」

「ちょ……えっ……そんな……私を置いて逃げるんですか……？」

「……ああ、そうか、その発想はなかったなあ。なるほど、それもいいかもしれないなあ……」
「えっ？」

「なあスカイ、一緒に逃げようか。人並みの暮らしは保証してやれないけど、なんとか食っていくくらいはできるだろ」

「一緒に？」

「情けないことに俺のほうが先だったけど、このままでは早晚スカイも壊れてしまう。壊れる

前に、壊れたトレーナーが壊れかけた教え子を攫ってどこかへ逃げてしまうというのも、世間から何を言われるかわかったもんじやないかなり背德的なシナリオだが、世間体をかなぐり捨ててしまえば、別に悪い話ではないなあ。逃げるにしたらって、一人と二人では、できることも倍じゃ利かないくらい広がりが出てくる。一人ではできなかったことが、二人で協力して役割を分担すれば豪勝でできるってことがいくらかもある。文殊の知恵にはまだ一人足りないが、それでもあらゆる可能性が二倍どころか五倍、下手すれば十倍まで広がるからな。昔から「二人は食えぬが二人なら食える」とも云うし、……うん、面白いことになる気がするよ」

「ちょ……ちょっと、考えさせてください。今いきなりそんなカードを見せられたからって、すぐにそんなこと決断できませんって……」

「おはようございますトレーナーさん」

「おはようスカイ。……いい顔つきに戻ったな」

翌日、午前六時のトレーナー室。万全の格好で向かった私を、いつ淹れたものなのかわからない、すっかり冷たくなってしまったホットコーヒーをじっと見つめていたトレーナーさんは、

一瞬でいつもの穏やかさに戻って迎えてくれた。

「にやはは……もうちょっと、セイちゃん頑張ってみようかなって。まだ腐るには早過ぎるかなーって」

「そうか、よかった……。これで思い残すことがなくなったよ。スカイをいつまでも遠くから見守っているからさ、これから、頑張れよ？」

「寝言は寝てから言いましょうよトレーナーさん。トレーナーさん以外の、誰がセイちゃんの面倒を見るんです？」

「ん？」

「いくら中央のトレーナーが優秀多彩だとしても、こんなウマ娘の面倒を見られるトレーナーなんてトレーナーさんくらいしかいませんよ。ほらほら、トレーニング行きましょう？」

「えー、今日にでもあの屈を提出すれば来月の頭ぐらいには自由の身だなんて思ってたのに、スカイはまだ俺をこき使うの？……やるからには手加減しないぞ？ これまでの遅れもあるしな。中途半端な逃げは絶対に赦さないぞ？」

ふわふわとした声が、急に凛々しくなった。瞳に闘志が、空気に覇気が。ここにいるのは、確かに私が尊敬する、そしてもうどうしようもないくらい慕っているトレーナーさんだ。たと

え私が再起不能に潰れても、この人を再起不能になるまで潰すわけには、いかない！

「いやー、今回はまんまとトレーナーさんの策にハマられちゃいましたね。ちょっと悔しいけど、我慢してあげます」

自分の胸にうまく表現できない熱いものが宿るのを感じながら、それでも虚勢を張ってみる。「そんな手の込んだ演出なんか俺の頭で考えられるわけないだろ。第一そんなリスクしかない作戦、失敗したらどうすんだ。スライ、起きてるんなら寝言をほざくんじゃない。……やるべきトレーニングは山ほどあるが、まずは坂路だ行くぞ？」

ふわりと撫でられた耳を手で覆う。とても冷たい手。この人も私と同じように、なにか熱いものが胸に宿っているのかな……。

「でもセイちゃんも、トレーナーさんと一緒にどこかに逃げるのは、ちょっと魅力的な提案に感じましたよ？」

でももう少し。もう少しだけ、セイちゃん頑張りますからね。

だから、ちゃんと見ていてくださいね、私のトレーナーさん！

それぞれのカタチ

「純粹に疑問としてみんなに訊きたいんだけど……」

キアキア騒いでいる五人の輪から少し外れたところで、おずおずとセイウンスカイが手をした。

「どうしたのセイちゃん？」

「いや……そんなにみんな、熱烈なキス、いつもしてるの？」

「は？」

質問に五人の声がハーモニーを奏でる。

「いやいや、セイちゃんがキス未経験というわけではないんですよ？ あの人とだって、キスくらいするしすね」

「なんだあ、セイちゃんも好きなんだへ」

「嫌いなんて言っていないじゃん。求めて貰えるのは、すごく嬉しいし……。でも」

スペシャルウィークの声にスカイが返す。

「なんていえばいいのかな、気づいたら終わってるというか、して賣っている間の記憶を思い出せないというか。だから私は、ぎゅっと抱きしめてもらったり、頭を撫でてもらったり、キスでも頬とか額にしてもらったり、唇でもちよっと触れる程度にでないと、愛されていることを実感できないというか……あー、どう表現すればいいのかなあ」

「ああ、そういうことね。……スカイさん、まだまだウブねえ」

「へっばこー流のキングには、あんまりそういうこと言われたくなかったんだけどな……。……まあでも今の私は確かにキングよりは経験値が高くないから、甘んじて受けるけどもさー」
「ふふっ。昔からセイちゃんは自分から仕掛けるのはとても強いのですが、仕掛けられるとしても弱かったですからね」

「グラスちゃんまで弄ってくるの？ 辛いなあ」

「要するに、熱烈に求められると自分に余裕がなくなっただけで愛され実感が得られないから、リアルタイムに愛され実感を受けられるソフトタッチがいいってことかな？」

「あー……ツルちゃんそれ。多分それ。めちゃくちゃ強い麻薬受けると飛んじやうから、ほんのりとふわふわな気持ちになれる程度の弱いのを投与されたいというか」

「またセイちゃんは強いのを打たれ慣れてないんだ？　なまらめんこいべさ！」

「スベちゃんとは大家族だもんねえ。その点私は……よっと。……ちよつともう一度露天風呂行ってくるよ。風に当たってクールダウンしてくる」

一枚の紅葉が湯に揉まれている。十七夜くらいの月が濃い群青の空を焼いている。露天の大きな岩に背を預けながら、空を仰ぐ。

「スカイさん、隣、いいかしら？」

「……あれ、キング？　せつかくの同期達との恋バナ、参加しなくていいの？」

「それならエルさんが情熱的に語り始めて、風向きが少し下流に傾く様子があつたから、ちよつと離れたのよ。それにあなたとこうやって二人でじっくり話せる機会も、たまにはほしいと思ってる」

「……まあ、特に断るべき理由はないし、いいよ」

「失礼するわ」

キングヘイローは身体に巻いていたタオルを巧みに外しながら湯船に身を沈め、別の岩に背

を預けた。

「最初にひとつ言わせてちょうだい」

「えー、開始早々お説教？」

「他人の芝生は青く見えるものよ。大家族には大家族の幸せの形がきつとあるでしょうけれど、夫婦がふたりで手を取り合って小さな喫茶店を切り盛りするという幸せはスカイさん達にしかないの。卑屈になつてはダメよ」

「……そう見えた？」

「よそはよそ、うちはうち。それともスカイさん、あなたは今、トレーナーから受けている愛の形に不満なの？」

「そういうわけではないけど」

「ならそれでいいじゃない。さっきだってあなた、盛大に赤裸々に、幸せそうな顔で惚気ていたじゃない」

「そ、そりゃあ、まだ新婚ですから？」

「そこよ。まだ結婚生活が始まったばかりの経験浅い二人が、結婚生活三十年超の熟練と同じことをできるわけがないわ。そして逆に、熟練であるからこそ、スカイさん達のように初々し

「コミュニケーションがもうできないケースだってあるのよ？」

「……たとえば？」

「そうね。いくら愛していても、さすがにもうあの人と一緒に入浴なんてできないわよ。お喋りだって少なくなつて、日によつては、あの人から『おはよう』と『おやすみ』以外の言葉を聞いていないなんてことも。私が世間話なんかしたつて、聞こうとすらしてくれないこともあるわ。そこから較べたら、私はあなたたちの今の距離感が羨ましいわ」

「そう……そっか……」

「だからスカイさん、自信を持ちなさい。自分たち夫婦は幸せですつて。それが一流夫婦の妻からのアドバイスよ」

「うん……ありがとねキング。……私、もうそろそろ上がろうと思ってるんだけど、キングはどうする？」

「あら。それなら私も上がろうかしら」

「……もしかしてなんだけどさ」

「なにかしら？」

「それをこっそりと伝えるために、私のところに？」

「……そ、そんなわけではないじゃない。何を言っているのかしら？」

そのキングの尻尾が一瞬だけピンと張ったのは見たけど……見なかったことにしようと思う
セイウンスカイだった。

家に刃向かい、血にあらがって

「よく降るし、よく吹くなあ……」

「ですね……」

旅館の窓は横から殴る雨で滲み、外の様子はよく見えない。

久しぶりにあの人と泊まりがけでお出かけができるだなんて年甲斐もなく夢見たせいなのか、今日はずっと宿の部屋に閉じ込められそう。

「まあ、さすがにお天気はどうしようもないですし、今日はもう諦めて、お部屋でまったりと過ごしましょうよ？」

私は湯呑みをふたつ卓袱台に立てて、急須のお茶をたばたと注ぐ。こちらの銘菓らしいお菓子がとてもおいしくて、旅館の帳場で早速購入したそれを開けて、私の隣のは布団に座るように促した。

本当は私も残念。お天気がここまで荒れていなければ、今頃は釣船で沖に出て大物を狙うは

ずで。情報では四十センチ超が釣れるとのことでの釣果も気になるけど、引きがとても強くて魚との駆け引きがエキサイトすると書いてあったから、楽しみにしていたけれど。悪天候で船を欠航するという連絡を受けてしまったはどうにもならない。

「まだ明日、狙えるじゃないですか。お店は明後日までお休みにしたんですし。……それともしかして、このセイちゃんと同じ部屋で一日ずっと過ごすのが恥ずかしいんですか？」

「そんなわけではない……ことはないな。うん、結構恥ずかしいというかそわそわするというか、緊張するというか……」

「ちよっ、そこで照れないでくださいよ。私まで恥ずかしくなるじゃないですか！」

二人ともまだ結婚生活初心者マークのせいで、最初のうちは隣り合って座っているのに顔の向きが微妙にずれていて、恥じらって。でも、気を紛らわせるためにテレビの電源を入れてみると、この宿は有線放送を引いているみたいで、レース中継チャンネルがあって。お互いに共通する話題でもあるし、なんなら二人が繋がったきっかけでもあるので、ここに周波数を固定した。

「惜しかったな、今のレースの七番の子。先頭を一瞬でも明け渡したくないって思ったか、ちよっと中盤でムキになりすぎたな」

「三番の子の末脚も凄かったですね」

気がついたらレースを見て、二人でそんな意見交換なんかをしていて。やっぱり、元トレーナーと元ステイヤーだねって笑ったりして。

お昼ごはんは宿の仲居さんが気を利かせてくれて、私たちのまかないなので簡単なものしかお出しできませんがと言いながらも、とろろ昆布で巻いたおにぎりや玉子焼きと、温かいお味噌汁と香の物を小鉢に盛って持ってきてくれて、お互いに肩を寄せ合ってちよつとイチヤイチヤしているのを目撃されて、夕食の配膳で下膳するので部屋の隅にでも食器は固めておいてくださいお邪魔しました、だなんて言われて気恥ずかしくなったりしたけど、お昼をどうしようかと思っていたのでこれは純粋にありがたかった。あの人が心づけと称してポチ袋をそつと渡していたのを見たので、たぶんそれがこの昼食に繋がったのかなと思う。

「……そういえば今日の小倉第八レース、親戚の子のデビュー戦ってスベちゃんがメッセージで言っていましたね」

「小倉の第八レースというと……いまパドックが映っているこれじゃないのか？ スペシャルウィークの親戚か。どの子だ？」

「あ、今映ってるこの子ですよ。こんな名前だった」

「ちょっと緊張が強いかな、顔が若干引きつってる」

「でもこの脚、良くないです？」

「ああ、余分な脂肪もないし筋肉も適正につけてきていると思う。おそらく食事も理想通りに食べて、しっかりトレーニングを積んできたんだろうな」

「あのスベちゃんのプロ戚なのに、食をコントロールできたんですねえ」

「こら。確かにスベシャルウィークはめっちゃたくさん食う子だったが、その分しっかり頑張つてトレーニングをしていたじゃないか、誰かさんのようにサボることもなく」

「ああっ！ 今頃お説教は禁止、禁止でーす！」

やがて別のレース場からの中継実況が入り、いよいよその子が走るレース。

「うわ……すこっ……」

「うん、あのスタートは驚異的だな。これは行けるぞ」

「……残り四百から一気に伸びましたね。結局七バ身差で勝利……すごい」

「仕掛けるタイミングも良かったな。それに序盤中盤でも先行を上手に煽ってスタミナを削っていたし、先行を焦らせることでその前に行く逃げのスタミナも間接的に削っていた。……これでデビュー戦か。恐れ入った」

あの人も湯呑みを持ったまま画面に釘付けで。

「そりゃああのスベちゃんのプロ感ですもんねえ。日本総大将の血統は伊達じゃないってことですよ。まあ、そこいくと私なんかホントにもうどうしようもなくダメダメで……えっ？」

不意を討たれたこともあるけれど、私の背中は畳に着いていた。それがあの人に押し倒されたせいだと気づくまでに、それほど長い時間は不要だった。

電灯の光を隠すように天井の方角にあの人の顔があつて、……その顔は怒っていた。

「スカイ」

「はっ……はい？」

「二度と言つな」

「……な、なにを？」

「血統とか、家柄とか。……そんなもんが優れているとか劣っているなんてことは、俺の前でもそうでなくても、もう二度と言つな」

不意に私の頬を何かが打つ。

「……泣いて……ます？」

「泣いてるよ」

「ごめんなさい」

「謝罪は求めていない」

「ごめんなさい」

「だから、謝るな。約束してくれ」

「……はい」

「よっ……と」

あの人は私に上半身をぐっと近づけてきて、私の背中に右腕を差し込むと、私の上体を優しく起こしてくれた。

「そりゃあ、俺だって知ってるよ。あの子の血統が世間一般の論調からすれば『いい』ことくらい。そして今日のレースを見て、多くの人が『さすがスペシャルウィークの血筋だ、凄い走りだ』って言うだろう」

「……はい」

「でも、血統や家柄だけがあっても走れないんだよ。今までに何十人のウマ娘が、『お前の親は、姉は凄かったのに』と言われて涙を流しながらトレセンを去って行ったことか。……スペシャルウィークの親戚のあの子は、血とか家とか関係なく、ここまで懸命に頑張ってトレーニ

ングを積んで、そして結果としてあのレースで勝った。逆に勝てなかった子達だってそうだ。誰も負けるためになんか走っていない。この日のために、この日のためにここまで頑張ってきて、たとえ分が悪かろうがそれでも勝とうとレースに出ているんだ」

「……はい」

「それを血筋や家柄がいいから勝ったんだとか、悪いから負けたんだなんて言うのは失礼どころの話じゃない、レースで走った全員に対する冒瀆だ」

「……はい」

「たとえばスカイ、お前は皐月も菊も獲ったよな。でももしそのインタビューで『私は血統も家柄も劣っていますが勝ちました』みたいな発言を少しでもしていたら、俺はそこに割り込んでお茶の間の見ているところで契約解除を突きつけていたぞ」

「ひっ……」

「たとえばキングヘイロー。彼女は良い血統の子だよ。でも皐月もダービーも菊も獲れなかった。だけど彼女は本当に懸命に、文字通り泥と血と汗にまみれながら過酷なトレーニングを、一度も泣き言を吐くことなく積んでいた。あの子にはちゃんとアイツがトレーナーとしてついていたから俺は何も言わなかったけれど、オーバーワークから来るケガを心配したことだって

一度や二度ではなかった。……そしてその上で、それだけ頑張ったのに勝てなかった。そこでスカイが軽率にもそういうことを勝利会見で言っていたとしたら、それはキングヘイローが積み重ねてきた努力を無駄なものだと斬り捨てるのと同じであって、そしてそれはキングヘイローというウマ娘の存在そのものに対する完全否定だ。……もちろん、寸分違わぬ資質でレースに挑んで、最後の最後に血や家の差で勝てるということは、あるいはあるかもしれない。でも、そういう偶然はそれこそ天文学的に少ない。つまり血や家なんか本人の努力の前には無視してもいいレベルの話でしかないんだ。だから、他人の努力の結晶に、そんなつまらない物差しを宛がわないでほしいんだ」

「はい……」

「ん、わかればいいんだ。……俺のほうこそごめんな。急に怒って」

「いいんです。あなたは何も間違ったことを言っていない。私はそう思いますから」

「俺があのとスカイを担当することを決意したのは、つまり、そういうことだよ。血統とか家柄とか、そんなことで篩い分けするなんてナンセンスだと思った。俺をトレーナーに選んだ理由がたとえ『御しやすそうだったから』であつたとしても、俺を慕ってくれたスカイを裏切るなんてできなくて、そして君にはなにか無限の可能性が見えた気がしたんだ。だからこそ、

それを信じて君を担当したんだ。だからスカイ本人にそれを否定されると、俺の存在意義もなくなってしまうんだ。……まあ、血統やら家柄とかいうものを神聖視する世間に対するレジスタンスという側面もそこにあつたことは否定できないけどな。雑草魂なめるんじゃねえぞ、っていう」

「ありがとうございます。嬉しいです……」

「それと」

「はい？」

「こうしてスカイと夫婦になったのも、だいたい同じ理由だ」

「うう……。それについては私、あなたに猛抗議したいです」

「うん？」

「判断があまりにも遅すぎる、って」

「ああ……それは本当に申し訳なかった。これからどこまで取り戻せるかわからないが、精一杯務めさせてもらう」

私を包む温かさから、おひさまの匂いがした。

この爽やかな青空を
自由な雪のように
駆ける天馬に捧ぐ

『明日もまた青空の空騒りなし』

第二巻

原作

二次制作者

表紙作者

製本

制作年月日

Cygames 『ハズキ・リミテッド』

空音ひびき (精華文学館)

<https://kahvi.squares.net/>

pen1-sorane@postman.jp

アツキさま

X (Twitter) @azuki1matcha

SKED <https://sked.jp/@azuki1matcha>

太陽出版株式会社

441-8077 愛知県豊橋市神野新田町口ノ割100番地

<http://www.taiyoushuppan.co.jp/>

令和七年五月六日 第一刷